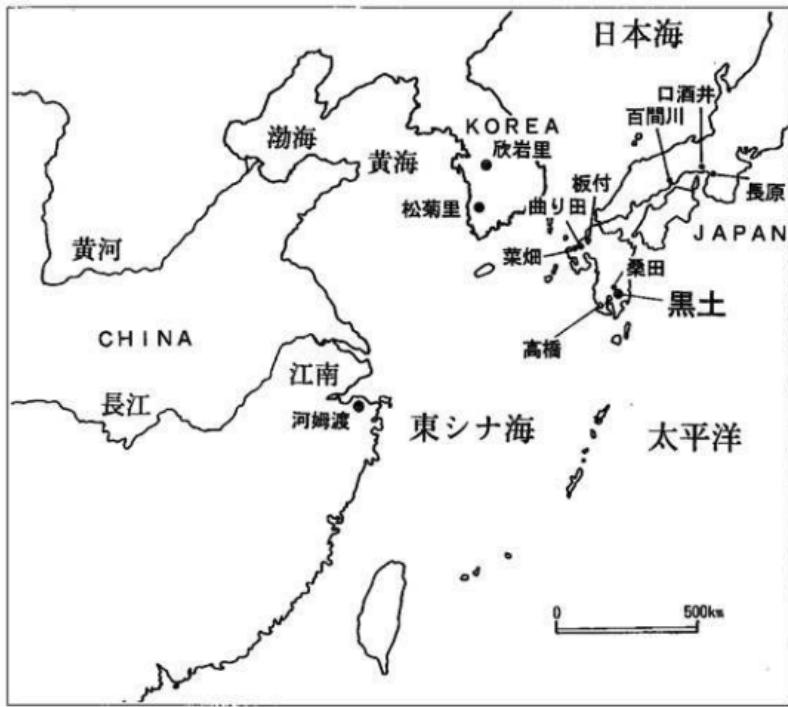


KURO TSUCHI - SITE
黒 土 遺 跡

1994年3月31日
宮崎県都城市教育委員会

表紙：浅鉢上器胎土内に混入した米の顕微鏡写真

KURO TSUCHI - SITE
黒土遺跡





遺跡遠景（南側上空から）



縄文時代晩期末の遺物



胎土内混入米顕微鏡写真（174）



初痕顕微鏡写真（175）



胎土内混入米顕微鏡写真（176）

序 文

本書は平成3年度、民間の宅地造成に伴い都城市教育委員会が受託事業として実施した都城市大

岩田町に所在する黒土遺跡の発掘調査報告書であります。

平成4年2月から同年3月までの現場における発掘調査の結果、縄文・弥生・平安・中世の遺物・

遺構が発見されました。中でもマスコミを通じて大きく報道されたように、縄文時代晚期の土器に

伴って石庖丁が発見されたことと遺跡の土壤中から稀のプラント・オパールが検出されたことは非

常に画期的で、宮崎県の稻作文化開始期の解明にとって貴重な発見となりました。

本書の刊行が当該地域の歴史解明の貴重な一助となり、歴史教材として生かされるとともに、今
後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、株式会社トーアの関係者をはじめその代理人の魚矢隆文氏
には多大なご援助・ご協力をいただきました。また、出土資料につきましては多くの先生方にご指
導・ご教示いただきました。ここに心から感謝の意を表します。

1994年3月

都城市教育委員会
教育長 限 元 幸 美

例　　言

1. 本書は株式会社トーアによる分譲住宅建設に伴い、都城市教育委員会が平成4年2月10日から平成4年3月13日まで発掘調査を実施した黒土遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査地は宮崎県都城市大岩田町5597番-5ほか（字黒土）であり、調査面積は1,618m²である。
3. 現場における遺構の実測および写真撮影は、作業員の協力を得て、都城市文化課主事桑畠光博・同主事矢部喜多夫・同主事補横山哲英が行い、遺構の空撮は株式会社スカイサーベイに委託した。本書掲載の遺物の実測と写真撮影は作業員の協力を得て桑畠が行い、すべてのトレースは桑畠があたった。なお、土器片の顕微鏡写真は宮崎県文化課戸高真知子主任主事によるものである。
4. 本書使用のレベルは海拔絶対高であり、基準方位は磁北である。
5. 本書の執筆は第1・2・3・5章を桑畠が行い、第4章の自然科学分析については宮崎大学農学部藤原宏志教授に調査を依頼した。なお、編集は桑畠が行った。
6. 石器の石材鑑定は宍戸地質研究所の宍戸章氏に依頼した。また、一部の土器・石器については以下の方々の鑑定を受けた。

石川 悅雄 小田富士雄 上村 俊雄 片岡 宏二 甲元 真之 下條 信行 島津 義昭
高倉 洋彰 武末 純一 田中 良之 戸高真知子 西 健一郎 春成 秀爾 藤尾慎一郎
本田 道輝 柳沢 一男 山崎 純男

(五十音順)
7. 発掘調査におけるすべての記録と出土遺物は、都城市立図書館内の文化財整理室に保管されている。

目 次

卷頭口絵 遺跡遠景

縄文時代晩期末の遺物

米・羽痕顕微鏡写真

第1章 序 説	10
1 調査に至る経緯	10
2 調査体制	10
第2章 遺跡の位置と環境	11
第3章 調査の記録	13
1 調査経過と概要	13
2 遺跡の層序	13
3 遺構	19
1) 弥生時代の遺構	19
2) 中世の遺構	21
4 包含層出土遺物	24
1) V層出土土器	24
2) V層出土石器	46
3) IV層出土土器	47
第4章 植物珪酸体分析	55
第5章 総 括	57
1 V層出土遺物の位置付け	57
2 ま と め	62

挿 図 目 次

図1	遺跡位置図	11
図2	遺跡周辺地形図	12
図3	調査区域図	14
図4	遺構配置図および地形縦断図	15~16
図5	土層断面図	17~18
図6	弥生時代遺構実測図	20
図7	弥生時代遺構内出土遺物実測図	21
図8	中世遺構実測図 (1)	22
図9	中世遺構実測図 (2)	23
図10	V層遺物分布図 (1)	26
図11	V層遺物分布図 (2)	27
図12	V層出土土器〔第1群〕実測図	28
図13	V層出土土器〔第2群〕実測図	29
図14	V層出土土器〔第3群・甕〕実測図 (1)	30
図15	V層出土土器〔第3群・甕〕実測図 (2)	31
図16	V層出土土器〔第3群・甕〕実測図 (3)	32
図17	V層出土土器〔第3群・甕〕実測図 (4)	33
図18	V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図 (1)	34
図19	V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図 (2)	35
図20	V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図 (3)	36
図21	V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図 (4)	37
図22	V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図 (5)	38
図23	V層出土土器〔第3群・壺〕実測図	39
図24	V層出土土器〔第3群・壺その他〕実測図	40
図25	V層出土土器〔第4群・甕〕実測図 (1)	41
図26	V層出土土器〔第4群・甕〕実測図 (2)	42
図27	V層出土土器〔第4群・壺〕実測図	43
図28	V層出土土器〔第5群〕実測図	44
図29	V層出土石器実測図	45
図30	IV層出土土器実測図	46
図31	A地点プラント・オバール定量分析結果	56
図32	B地点プラント・オバール定量分析結果	56
図33	大岩田村ノ前遺跡出土の弥生時代前期甕	62

図 版 目 次

図版 1	遺跡遠景（北側上空から）、調査区全景（真上から）	
	北区遺構群（真上から）	65
図版 2	G-13区土層断面（西から）、A地点土壤採取風景、竪穴住居跡覆土断面 竪穴住居跡覆土内遺物出土状況、竪穴住居跡完掘状況、土坑完掘状況	66
図版 3	1号溝、1号溝土層断面、2号溝、2号溝土層断面、1・2号道路状遺構、3号道 路状遺構	67
図版 4	G-14・15区（V層）遺物出土状況、F-12区（V層）突帯文壺出土状況 G-13区（V層）丹塗磨研壺出土状況、F-12区（V層）石庖丁出土状況 G-14区（V層）石製土掘り具出土状況、F-12区（V層）磨製穿孔貝出土状況	68
図版 5	第1群土器、第2群土器、第3群土器突帯文壺とその底部	69
図版 6	第3群土器精製鉢、第3群土器粗製鉢、第3群土器組織痕土器、木葉圧痕土器	70
図版 7	第3群土器壺、第3群土器その他の器種	71
図版 8	第4群土器壺、第4群土器壺、竪穴住居跡出土土器、土坑出土土器、 竪穴住居跡・土坑出土磨製石鏡、第5群土器、平安時代～中世の土器	72
図版 9	石庖丁、磨製穿孔具、石製土掘り具、粉痕土器（33）、粉痕土器（98） 糊痕土器（175）、米混入土器（174）、米混入土器（176） 糊痕微鏡写真（175）、米顯微鏡写真（174） 米顯微鏡写真（176A）、米顯微鏡写真（176B）	73
図版10	器面調整痕と組織痕	74

表 目 次

表 1	土器観察表（1）	48
表 2	土器観察表（2）	49
表 3	土器観察表（3）	50
表 4	土器観察表（4）	51
表 5	土器観察表（5）	52
表 6	土器観察表（6）	53
表 7	土器観察表（7）	54
表 8	A地点プラント・オパール定量分析結果	55
表 9	B地点プラント・オパール定量分析結果	55
表10	擦り切り技法石庖丁出土遺跡	61

第 1 章 序 説

1 調査に至る経緯

平成3年10月、宮崎県都城市大岩田町の畠地に分譲住宅建設計画がもちあがり、事業計画者である株式会社トーアから都城市教育委員会へ遺跡の有無の照会が出された。当該地は、昭和62年に同市教育委員会が実施した遺跡詳細分布調査による市内遺跡番号5035・横尾原遺跡に含まれており、弥生・中世の遺物の散布が確認されていた。そこで、都城市教育委員会は、遺跡の状態をより具体的に把握するために、平成3年11月26日から同月30日かけて、開発予定地に5×5mのトレンチを5か所に設け、試掘調査を実施した(図3)。その結果、一部において耕作による擾乱が認められたものの、遺物包含層の残存状況は比較的良好であり、弥生時代の土器や中世の土師器などが得られた。また、幅約1.6mの中世の溝状遺構も確認された。この結果にもとづいて12月12日に業者と教育委員会の間で遺跡の取扱いに関する協議が開始されるとともに、株式会社トーアから平成4年1月30日付で、文化庁へ埋蔵文化財発掘の届出が提出された。造成計画は、幅員6mの道路を通し、宅地33区画を造るというものであったが、宅地部分には盛上対応による保存措置を講じるということであり、結果的に道路部分(1,618m²)については、床掘りの関係から記録保存のための発掘調査を実施することになった。さらに平成4年2月7日に、両者間で埋蔵文化財の取扱いに関する協定と発掘調査の受託契約が結ばれた。現場における発掘調査は、平成4年2月10日から3月13日まで行い、引き続き遺物の整理を行った。

2 調査の組織

発掘調査は株式会社トーアから都城市教育委員会が委託を受けて実施し、経費の運用は同市文化課が行った。調査の組織は以下のとおりである。

調査責任者	都城市教育長	隈 元 幸 美			
調査総括	都城市文化課長	成 竹 清 光(平成3年度)			
	同 文化課長	松 山 充(平成5年度)			
調査事務局	同文化課長補佐	遠 矢 昭 夫			
*	同 文化財係長	海 田 茂			
	同 主事	横 山 寿 代(旧姓田部井)			
調査員	同 主事	桑 畑 光 博			
発掘作業員	福丸 貞行	福丸 治男	福丸 秀則	鶴 松雄	曾原 主吉
	松永 浩一	細山田 登	和田 利雄	塙 清人	桑山 重二
	大山ミツ子	満安エミ子	阿久根勇吉	阿久根敏恵	阿久根昌子
	吉村 則子	下田代清海			
整理作業員	猪股幸千代	池谷香代子	雁野あつ子	水 上 和子	

第2章 遺跡の位置と環境

黒土遺跡は宮崎県都城市大岩田町5597-5に所在する。都城市は九州島の東南部に位置しており、市域は東を東岳、柳岳などを主峯とする山地、西を瓶台山、白鹿山の山地に囲まれた南北に細長い盆地のほぼ中央を占め、行政区画は宮崎県の西南部、鹿児島県との県境に接している。当遺跡は市域の南部に位置し、通称横尾原の成層シラス（二次シラス）台地が北へ緩やかに傾斜する開析扁状地上に立地している（図1）。その西侧を大淀川の支流である梅北川が北流しており、河川流域の氾濫原面と調査地点との比高差は約5mを測る。当該地の現況は畑地であり、南から北へ階段状につくられている（図2）。

周辺の遺跡をながめると、本遺跡の後背の成層シラス台地上の南端部には横尾原遺跡があり、平成3年度の発掘調査で、奈良時代の骨蔵器2基や縄文時代後～晩期の土器・石器が出土したほか、縄文晩期前半の堅穴住居跡1基および土坑数基が検出されている。一方、梅北川を挟んだ対岸の台地上では、昭和37年の道路拡張工事の際に、「五十市式土器」と呼称される全縄文施文の完形土器が採集されている。また、同台地の北東端部の大岩田村ノ前遺跡では、平成元年に縄文時代から近世にかけての遺構・遺物が発掘されたが、中でも弥生時代前期から中期にかけての土器群はこれまで当地域において不明瞭であった当該期の良好な資料となった。

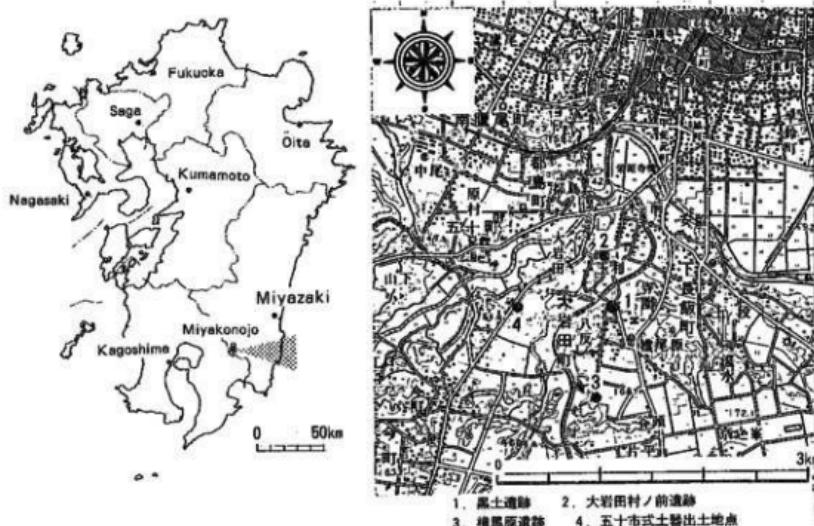


図1 遺跡位置図

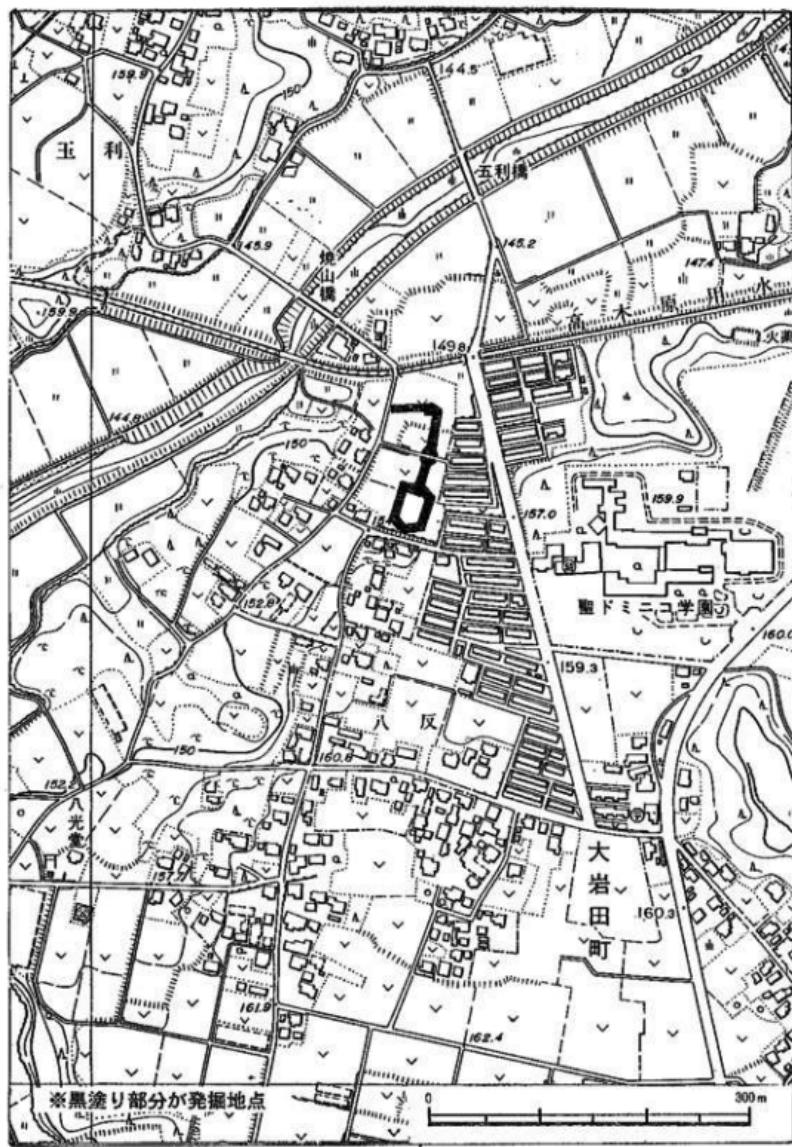


図2 遺跡周辺地形図

第3章 調査の記録

1 調査の経過と概要

発掘調査は造成予定地を縦断する幅6mの道路建設部分（面積1,618m²）について実施したが、結果的に地層の傾斜方向に合わせて、南北に細長いトレンチを入れるかたちとなった。

また、試掘調査において確認していた遺物包含層は調査区内で部分的に薄い堆積をみせる桜島起源の文明年間噴出といわれている降下軽石層と霧島御池起源の編文時代中期頃の噴出と推定されている降下軽石層に挟まれた黒色系土層（IV・V層）であり、調査はその結果に基づき、バックホーによって現在の耕作土である表土および旧耕作土（I・II層）を剥ぎとったのち、御池降下軽石層の上面まで、手作業で掘り下げた。なお、現場作業期間は平成4年2月10日から3月13日までである。以下、作業日誌の中からかいつまんでその概要を記す。

2月12日…作業員導入。調査区北側から遺物包含層を掘り下げはじめる。当該地区は耕作機械による掘削を受けているものの、残存したIV層中からは平安時代～中世の土器が出土する。さらに、同地区的V層からは弥生時代の土器が出土しはじめる。

2月16日…D・F-5区において文明軽石層（III層）の堆積する中世の溝状遺構を2条検出する。

2月18日…F・G-10・11区において縄文時代晚期と思われる上器が出土しはじめる。

2月24日…掘削土搬出にベルトコンベアー導入。F・G-14・15区において黒褐色土層（V層中）から刻目突帯文土器に伴って丹塗り壺と思われる破片がまとまって出土。また、同地点において偏平打製石器や編布圧痕土器なども出土。

2月25日…F-12区において、掠り切り技法で穴の開けられた石窓丁出土。

3月3日…H-5区において文明軽石層下の道路状遺構を2条検出。また、D-13区において硬化面を伴う溝状遺構を確認。これらは平安時代～中世のものと思われる。

3月6日…G-7・8区で弥生時代の堅穴遺構1基とG-5区で土坑1基を検出する。

3月8日…遺構平面図作成開始。分析のために土壤採取する予定のF-10区とG-14区の2か所においてトレンチによる深掘りを行う。

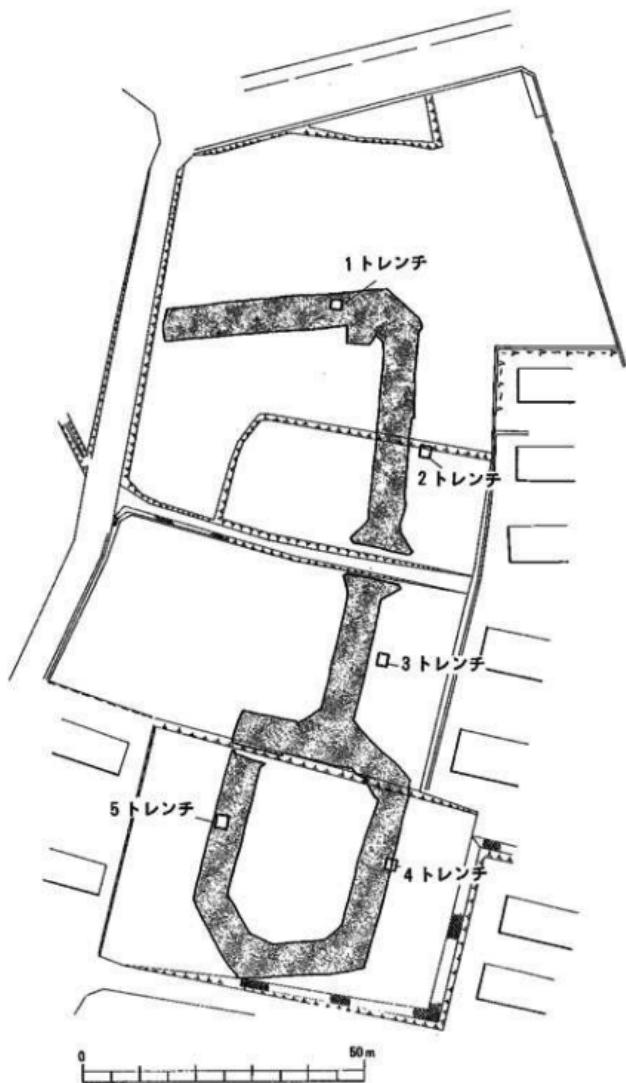
3月11日…齊崎大学農学部藤原宏志教授により、植物珪酸体分析のための土壤採取実施。

3月12日…遺跡全体の空中写真撮影。

3月13日…平板による遺構全体図作成のち、新聞社の取材対応。道具を搬出し、調査終了。

2 遺跡の層序

第2章で述べたように、本遺跡調査区域の地層は南から北へ向けて緩やかに傾斜している。図4の縦断面図を見ると、御池軽石層上面は北へ約2度の勾配で下っており、現状は階段状の田畠であるが、それより以北は調査地点の北端を境にしてより急な勾配で梅北川流域の氾濫源面に傾斜していたものと思われる。御池軽石層の上位にのる上層もおおむねその傾斜にあわせて堆積している。土層断面図を図5に示した。以下、各層について説明する。



※トレンチは試掘坑
アミかけ部分が調査区域

図3 調査区域図

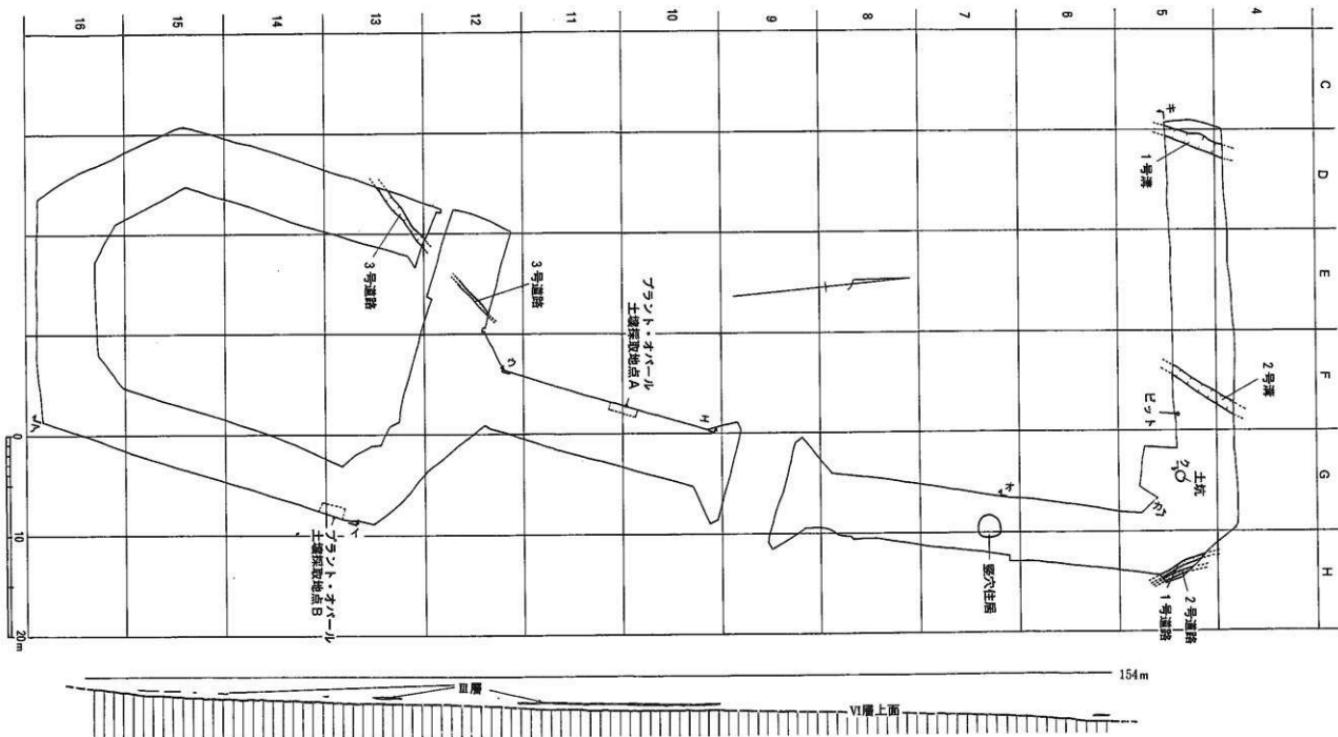


図4 造構配置図および地形概断図

タカカナは断面図基準点

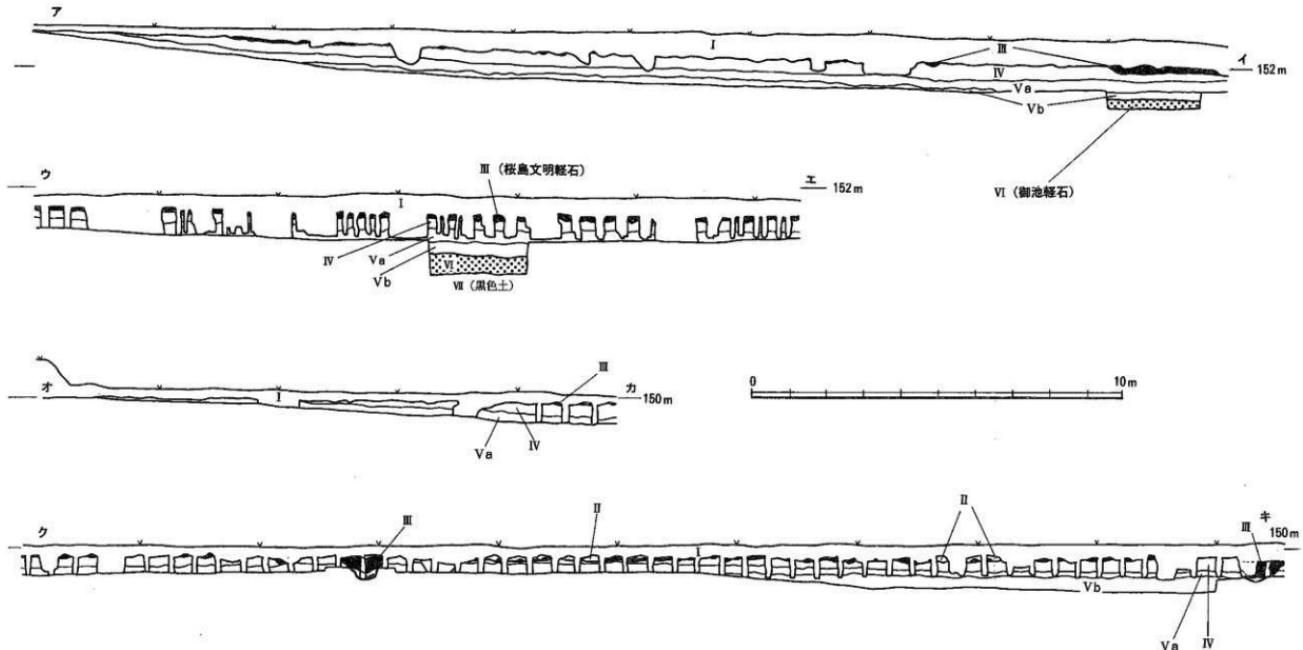


図5 土層断面図

- I層：層厚40～60cmの灰オリーブ砂質層である。現耕作土。
- II層：層厚約8cmの灰白色軽石粒を含むオリーブ黒色砂質層である。旧耕作土。
- III層：層厚5～15cmの灰白色軽石層で、調査区域内において部分的にとらえることができる。
- 桜島起源の降下軽石層で、年代は文明年間（1469～1486年）と推定されている¹⁰。
- IV層：層厚15～40cmの黒色粘質シルト層である。平安時代～中世の遺物包含層。
- Va層：層厚10～30cmの黄橙色軽石粒を含む黒褐色シルト層である。縄文時代～弥生時代の遺物包含層。
- Vb層：層厚20～30cmの黄橙色軽石粒を多く含み、硬くしまる黒褐色シルト層である。
- VI層：層厚約50cmの黄橙色軽石層である。霧島御池起源の降下軽石層で、噴出年代は約4000年前と推定されている¹¹。

3 遺構

1) 弥生時代の遺構

堅穴住居跡と土坑を1基ずつ検出している。

堅穴住居跡（図6上段）

G・H-H-7区において検出した。検出面はVb層上面である。直径2.1～2.2mの略円形を呈する。検出面からの深さ0.4mを測る。覆土は黒色粘質シルト層を基調とするが、黄橙色軽石粒の含み具合と硬さによって3つに区分できる。上層は黒色粘質シルトでレンズ状に堆積している。中・下層は黄橙色軽石粒を比較的多く含む黒褐色粘質シルト層で、下層は比較的硬くしまっている。覆土上・中層から土器片42点、貝殻2点、磨製石鏃1点が出土しているが、いずれも床面から10cm以上浮いたレベルである。ビットは6個検出されているが、形態はすべて不整形であり、深さは20cm以内と浅い。

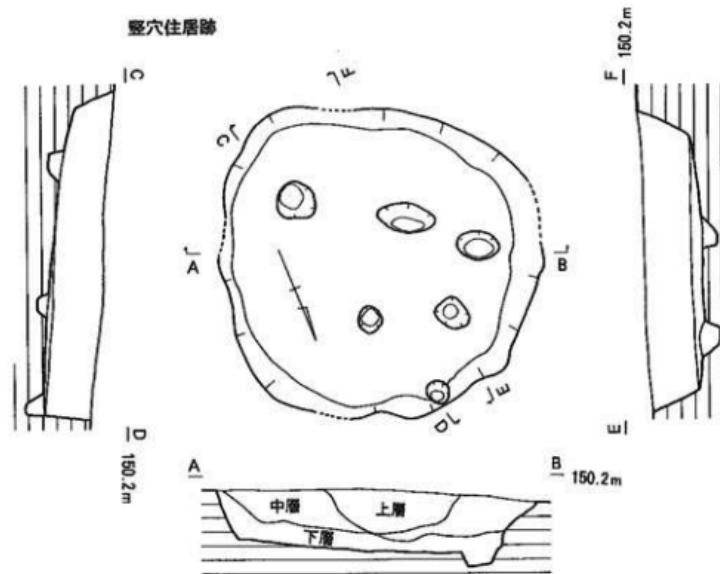
図7に覆土中の遺物で図化できたものを示した。1は壺である。口縁部に小さな突帯を貼り付け、細かい刻みを施している。その約1cm下にも突帯があったものと思われるが、剥落している。2は壺の底部で、縦方向のミガキが施されている。3は壺の肩部である。突帯上に部分的に細かい刻みをもち、外面上には黒色顔料の塗装が認められる。6は貝殻製の磨製石鏃で、先端部を欠失する。

土坑（図6下段）

確認当初は、長径2.35m・短径1.9mの不明瞭な梢円形状を呈するものと思われたが、その下部に直径1m程度の小規模な円形掘り込みが確認された。検出面・Vb層上面からの深さ0.3mを測る。覆土は、上層が黄橙色軽石粒を少量含む黒褐色粘質シルト層、下層が黄橙色軽石粒を比較的多く含む黒褐色粘質シルト層である。覆土中から土器破片40点、無斑晶流紋岩の剥片が13点、磨製石鏃1点が出土しているが、いずれも床面から10cm浮いたレベルである。

図7に覆土中の遺物で図化できたものを示した。4はキンクンモを含む壺で、肩部の三角突帯下に櫛描文が施されている。5は頸部に横位の沈線文が施された壺である。7は無斑晶流紋岩製の磨製石鏃である。側縁部には剥離痕が明瞭であり、未製品と思われる。

窓穴住居跡



土 坑

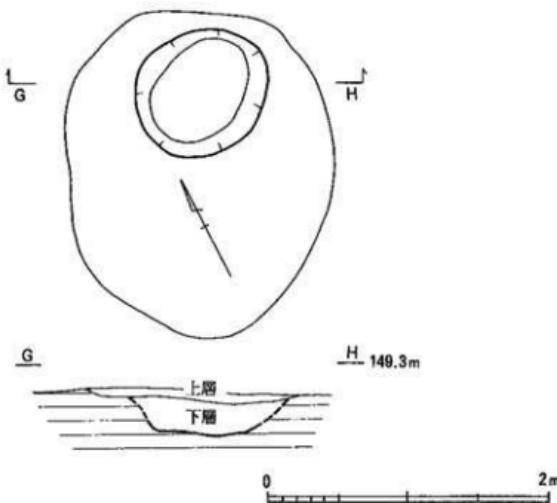


図 6 弥生時代遺構実測図

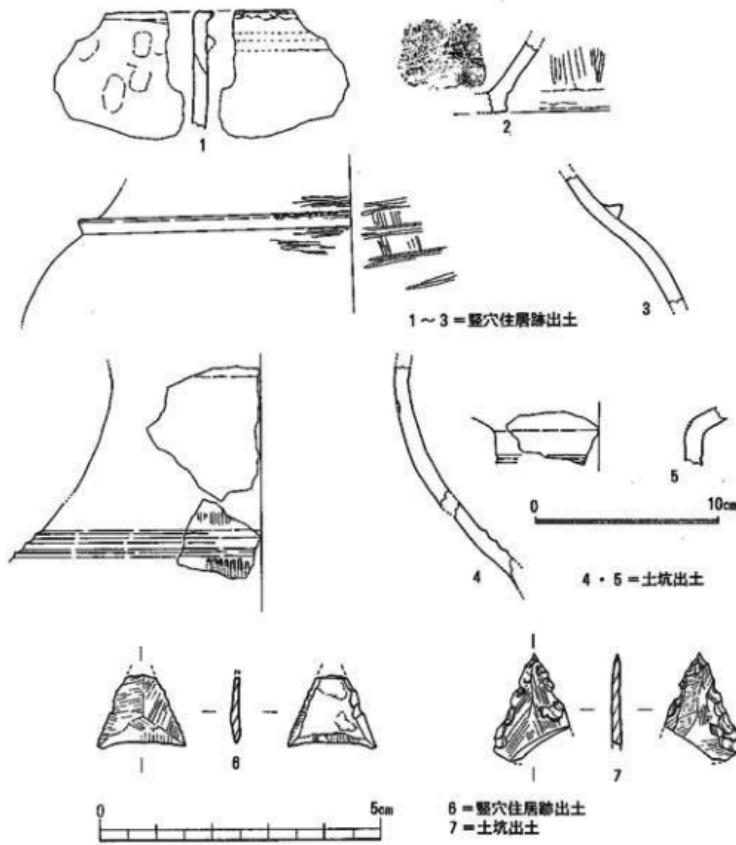


図7 弥生時代の遺構内出土遺物実測図

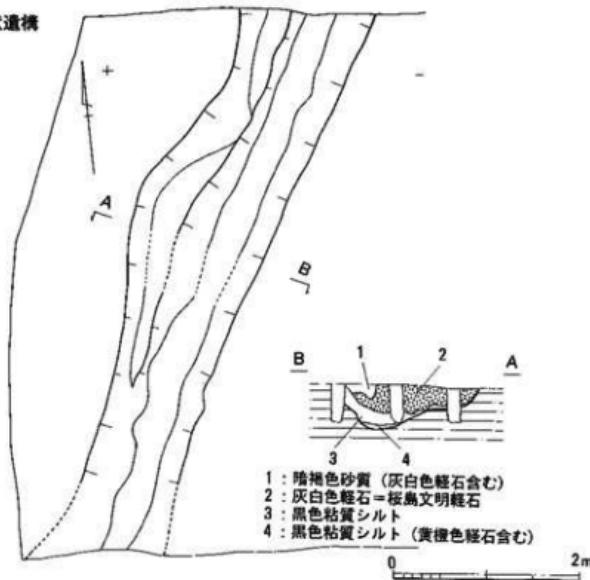
2) 中世の遺構

溝状造構2条、道路状造構3条、ピット1基を検出している。

1号溝状造構(図8上段)

D-4・5区のVa層上面で検出した。土軸をN-26°-Eにとりながら南北方向に走行する。断面形は基本的に「U」字状をなすが、壁面は部分的にゆるい立上がりを呈する。検出面での幅約1m~1.45mで、深さ0.5mを測る。遺構内堆積土は下部が黒色粘質シルト層、その上位に文明軽石層が厚く堆積しており、文明年間には完全に埋没したものと思われる。文明軽石層の下から釘と思われる鉄製品、青磁破片1点、土師器の糸切り離し底部小片1点が出土した。

1号溝状造構



2号溝状造構

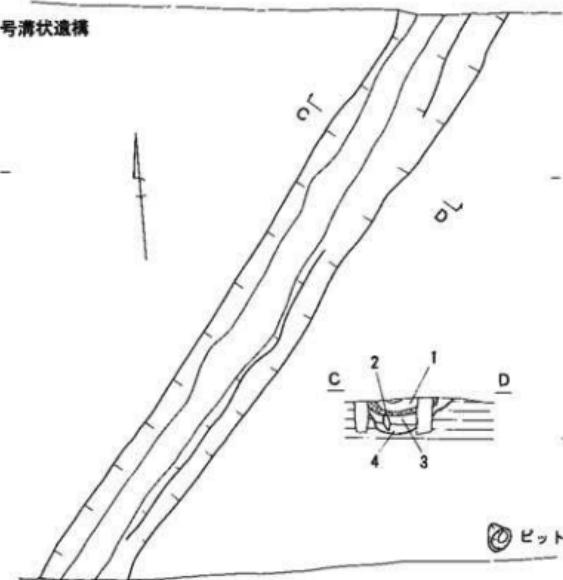


図8 中世造構実測図 (1)

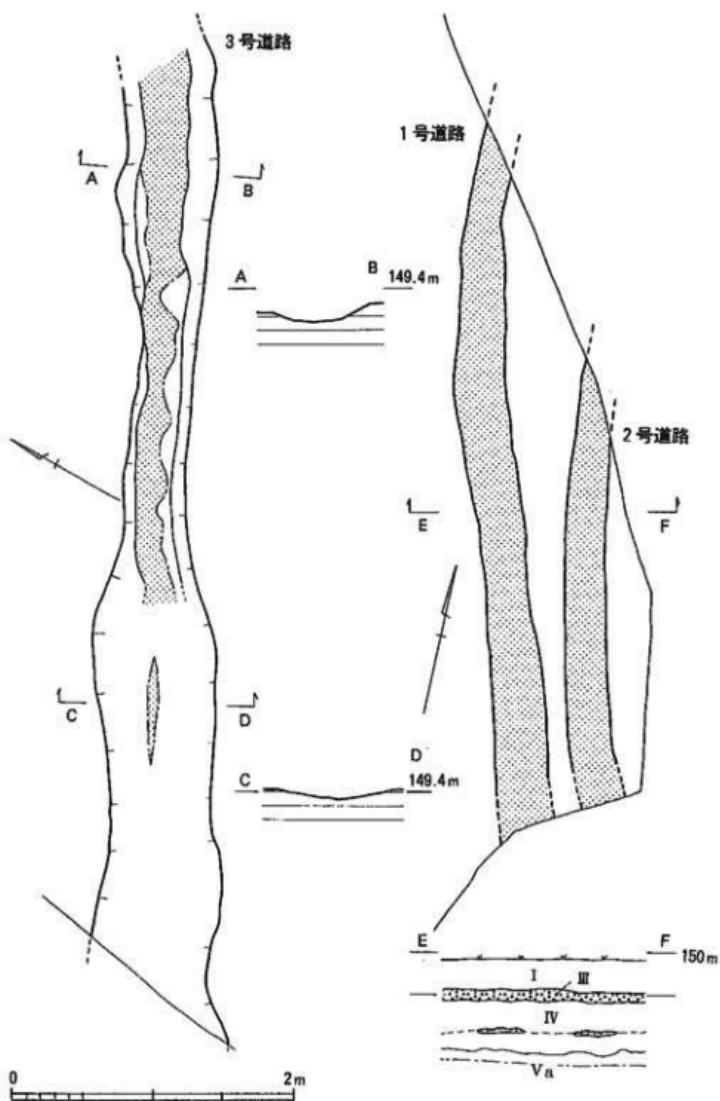


図9 中世遺構実測図 (2)

2号溝状遺構(図8下段)

F-4・5区のVa層上面で検出した。主軸をN-38°-Eにとりながら南北方向に走行する。断面形は「U」字状をなし、検出面での幅約0.75m~1mで、深さ0.37mを測る。遺構内堆積土は下部が黒色粘質シルト層で、その上位に文明軽石層が堆積しており、文明年間にはほぼ埋没したものと思われる。文明軽石層の下から時期不詳の土器破片1点が出土した。

1号道路状遺構(図9上段)

H-5区において文明軽石層のIV層中位でとらえられた。やや弧を描きながら南北に延びていくものと思われる。幅0.3~0.4m・厚さ3cmの硬化層をなしている。

2号道路状遺構(図9上段)

1号道路状遺構の東側に近接して、ほぼ並行に走行している。幅0.3m・厚さ3cmの硬化層をなしている。

3号道路状遺構(図9下段)

E-12区からD-13区にかけてVa層上面で検出された。主軸をN-54°-Eにとりながらほぼ直線的に走行する。立ち上がりのゆるい幅0.4~0.8mの溝状を呈し、その底面に幅0.35~0.1mの硬化面が形成されている。D-13区では硬化面がやや不明瞭となる。

ピット(図8下段)

F-5区のVa層上面で検出された。直径0.3m・深さは0.27mを測る。埋土はIV層である。出土遺物はない。

4 包含層出土遺物

包含層出土の遺物はおおむねIV・Va層から得られたものである。土層の説明の項でも触れたようにIV層から平安時代~中世の遺物が出土し、Va層(以下、V層)から縄文時代~弥生時代の遺物が出土しているが、一部I・II層中に2次的に堆積したものがある。これについては本米所属していたと思われる項目に含める。

1) V層出土土器

ここでは、分布状況をはじめ、形態・胎土・色調・調整などの諸属性を考慮し、既設の編年に照らした上で、次の5群に分類した。なお、上器の器種名称は右欄内に記したようにそれぞれに表現を変えてある。

第1群：縄文時代後期土器群 [器種名：深鉢・鉢など]

第2群：縄文時代晚期土器群 [器種名：深鉢・浅鉢・鉢など]

第3群：刻目突帯文土器群 [器種名：甕・壺・浅鉢・鉢など]

第4群：弥生時代前期土器群 [器種名：甕・壺など]

第5群：弥生時代中期土器群 [器種名：甕・壺など]

各土器群の調査区内における分布状況については図10~11のとおりである。

ともに刻目突帯文をもつ甕を主組成に含む第3群と第4群の区分について若干触れておく。

後述するように、第3群の甕の器面調整が工具ナデあるいはナデであるのに対し、第4群の甕の器

面調整は特徴的な粗いミガキである。この容易に識別できる二者の分布状況をみたとき、前者の分布が調査区南側（以下、南区）に顕著であるのに対し、後者が北側（以下、北区）に顕著であるというように主要分布域を異にして出土しており、その差が時期差を反映しているものと認識した。また、それぞれの甕に伴う蓋などの他の器種についても同様な分布状況を示すものをセットとみなした。ちなみに、遺物包含層が地表面から比較的深かったため現代の耕作による影響が少なかった南区では、第3群土器がまとめて出土しており、質・量ともに群を抜いている。

第1群 土器（図12）

図12は器面調整に丁寧なナデないしミガキの施されている深鉢である。G-15区ではVb層にくいこむのような出土状況が認められた。おおむね無文でありその特徴はつかみにくいが、頸部がくびれ、胴部の張る形態で、口縁部はフラットで直線的なもの（13～15・19a）と8のように肥厚するものがある。11や12には外面に凹線文がみられる。浅鉢は見つかっていない。なお、10は器面調整に比較的粗い工具ナデが施されているもので、赤褐色系の色調を呈することからこの群にいたが、第2群に含まれる可能性もある。

第2群 土器（図13）

図13の20～25は深鉢、26は鉢、27～32は浅鉢である。20・21は口縁部に粘土帯を貼り付け肥厚させるものである。24は張りだす形態の底部である。26は外面はケズリ調整で、内面はミガキ調整が認められる。27・28・31aは口縁部の内外面あるいは内面だけに凹線が施され、その先端が玉縁状をなすものである。調査時点ではこのタイプの浅鉢が次の第3群に属するものと考えていたが、分布状況からこの群に含めた。

第3群 土器（図14～図24）

図14～17の33～104は甕で、図化しうる資料は72個体分を数える（底部についても同一個体と思われる11縁部・胴部が認められない限り1個体としてカウントした）。器面調整は擦過痕を残すナデが主体となる。77の1点だけが一条突帯となる可能性があるが、他はすべて口縁部と胴部に一条ずつの二条突帯になるものと思われる。口縁部突帯を確認できる資料30個体のうち8点（33～40）は口縁部突帯がやや下がった位置にめぐらされるもので、他はすべて口縁最上端ないし口唇端部に接して貼り付けられている。胴部の断面形態が把握できる資料34個体のうち6点（39・70・72・73・74・81）が直線的なもので、他は、「く」の字に折れている。その形状には41・46・48・49などのように強く屈曲しつつ口縁部が反転するものと、33・34・40・68・69・76などのように弱く屈曲するものがある。突帯上の刻みは指頭によるもの（33～47・50・51・53～56・58・61・63・64・68・69・72～76）と工具によるものがある。工具による刻みにはいくつかの手法が認められ、棒状工具によって「U」字状を呈するもの（52・57・60・62・65・66）、ヘラ状工具によってえぐりとられ「V」字状を呈するもの（48・49・70・71・79）、角ばった工具を器面に対し垂直に押しつけることによって幅の狭い「凹」状となるもの（67・77～82）である。刻みの手法は指頭によるものが圧倒的に多いといえる。

器面調整は先に述べたようにおおむね工具ナデあるいはナデが主体であるが、34・77の内面調整はケズリ状で、76・82は内面調整はミガキ状の丁寧なものである。一方、46の内面調整はかすかに

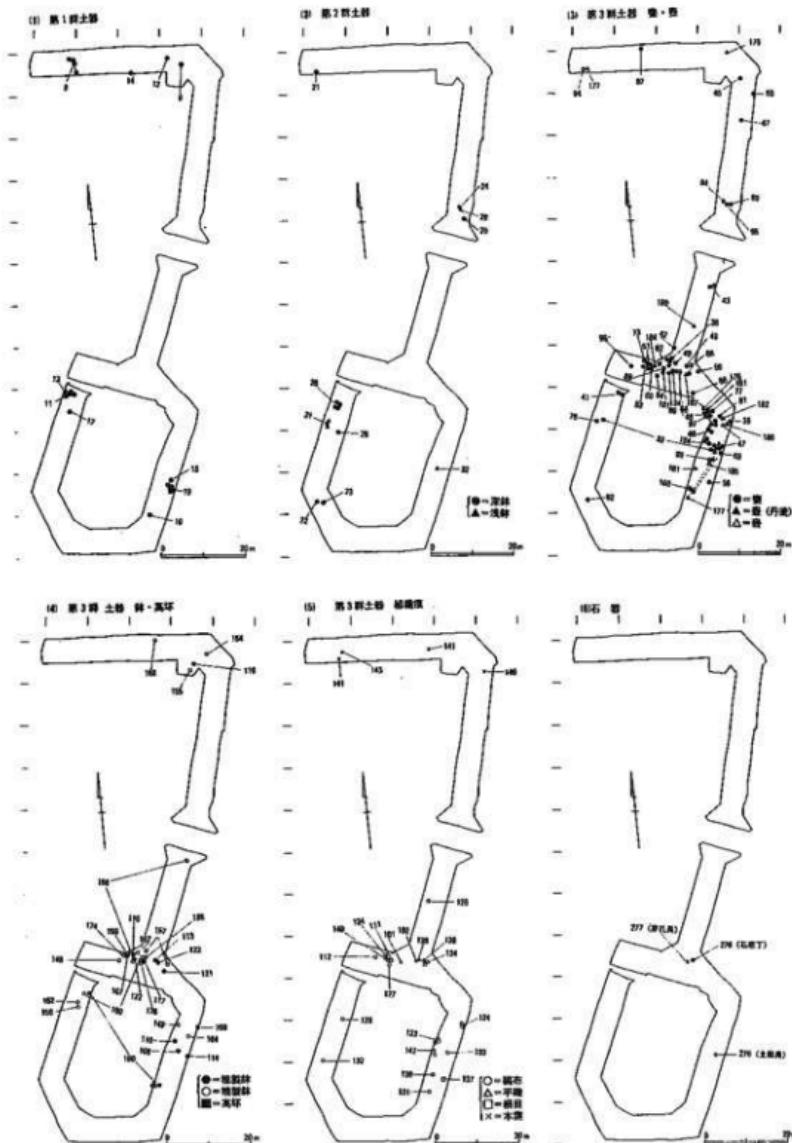


図 10 V層遺物分布図 (1)

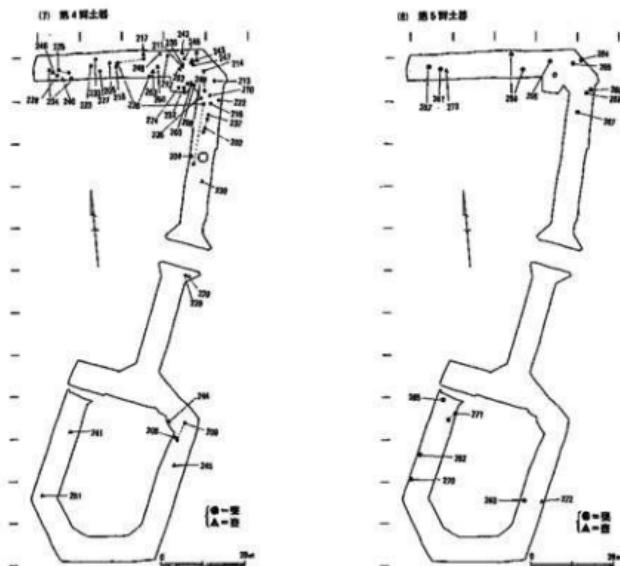


図11 V層遺物分布図 (2)

条痕を残しているが、それが貝殻によるものかどうか判然としない。

83~104は底部である。粘土板を貼り付けて、台形状を呈する83・84・85などや、底面とその内面に補強のための粘土を接合する98・99・100などがある。98は底面に網代圧痕が見られる。なお、33の胴部内面と98の胴部下半の外面には粗痕が認められる。

ちなみに、土器の胎土の特徴について述べると、ほとんどの器肉は黄褐色を呈し、スカスカした怪い印象を受け、第4群の甕とは対照的である。

図18~図20の105~146は粗製の鉢である。図化できた資料は36個体分を数える。そのうち組織痕を伴うものは約30点と思われる。105は単純な口縁形態をなすが、深鉢の可能性もある。110は口縁部に一条の指頭刻目の突帯をもつ小形鉢で、内面には比較的丁寧なナデ調整が施されている。106~140は外面上に粗いケズリ・ナデ調整、内面はミガキ状の丁寧な調整が認められるもので、111縁部外面上にススの付着しているものもある。112~121は口縁部に刻目突帯が施されており、121はヘラ状工具による「V」字状の刻目がつけられているが、他はすべて指頭刻みである。111・112・123~135は底面に編布圧痕、136は網目圧痕、137は平織と網目圧痕の複合、138~140は平織圧痕がそれぞれ認められる。一方、141~146は底部に木葉(葉脈)圧痕が認められる一群であるが、141は分布状況やカクセン石・白色の鉱物を含む胎土などからこのグループよりもむしろ第2群に含まれる可能性が高い。なお、編布圧痕土器の中の124なども同様な位置付が妥当かも知れない。

図21・22の147~172・174~176は精製の浅鉢と鉢であり、器面調整にはミガキないし丁寧なナデが施されている。図化できた資料は浅鉢が22個体分、鉢が7個体分である。浅鉢は沈線文をもつも

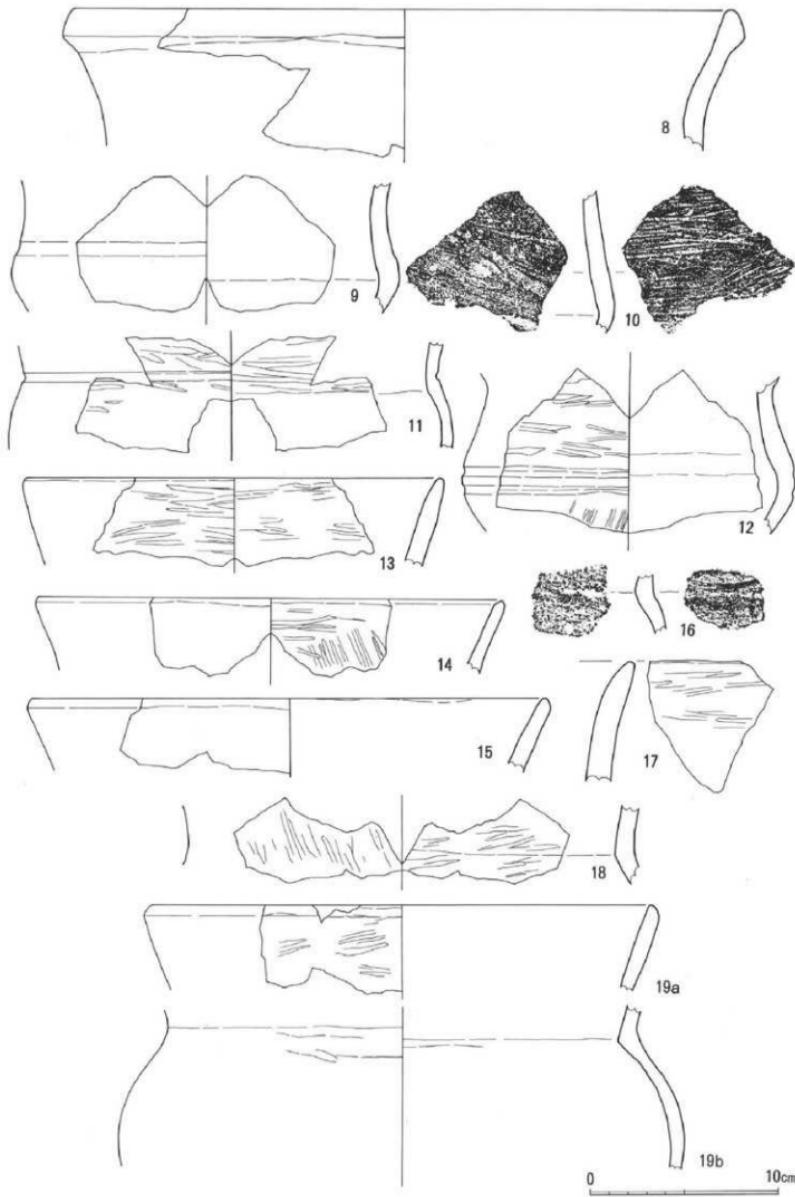


図12 V層出土土器 [第1群] 実測図

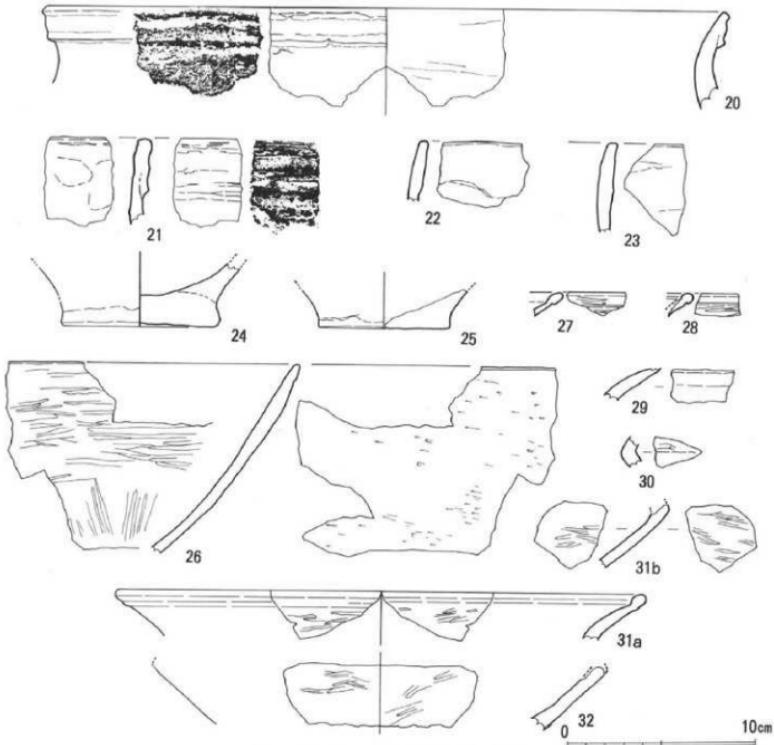


図13 V層出土土器〔第2群〕実測図

の（147～150・174）と口縁部に突帯文をもつもの（154～159）に細分できるが、いずれも胸部で屈曲する。148は口縁部だけに横位の沈線が施されている。153は外面に凹線状のくぼみが施されており、あるいは特殊な器種かもしれない。また、152は胸部が2段階に屈折するもので、上段の屈曲部に2条の沈線文が施されている。この種は1点だけ出土している。150・153・154の外面には丹が塗布されている。175は外面に粉痕があるが、156・174・176の胎土中には偶然に粘土によって被膜保護された米粒（玄米か？）の混入が認められる。176には3粒確認され、うち一粒は破損し、炭化した断面を露呈している。粒径は、長さ約4.5mm・幅3mmを測る。これらの浅鉢の底部は157・166・176に見られるように円盤状粘土板を貼り付けるという技法で作られている。160～165はやや器高の高くなる鉢で、160・161・162の外面にはススが付着しており、上記の浅鉢とは用途が異なるものと考えられる。これらには口縁部と胸部の屈曲部に突帯が貼り付けられている。160・162は外面に粗いミガキが施されている。また、底部は170のような形態になるものと思われ、底面にもミガキが施されている。

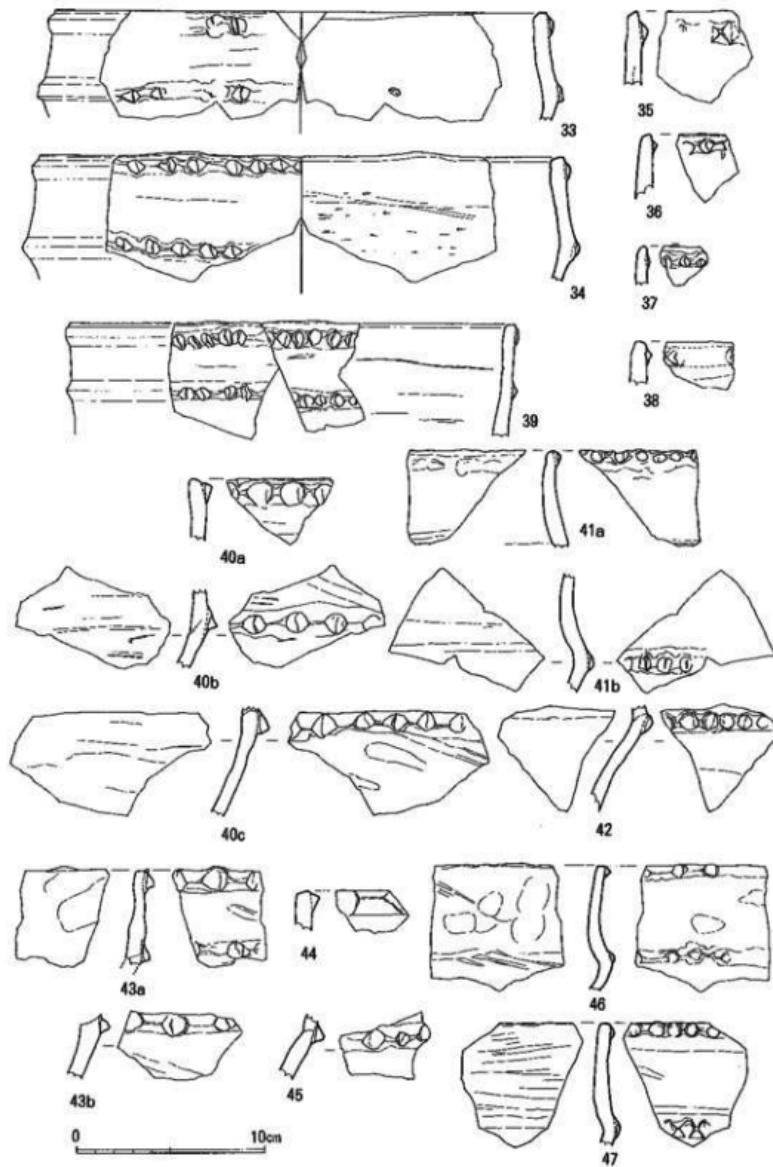


図14 V形出土土器〔第3群・盤〕実測図(1)

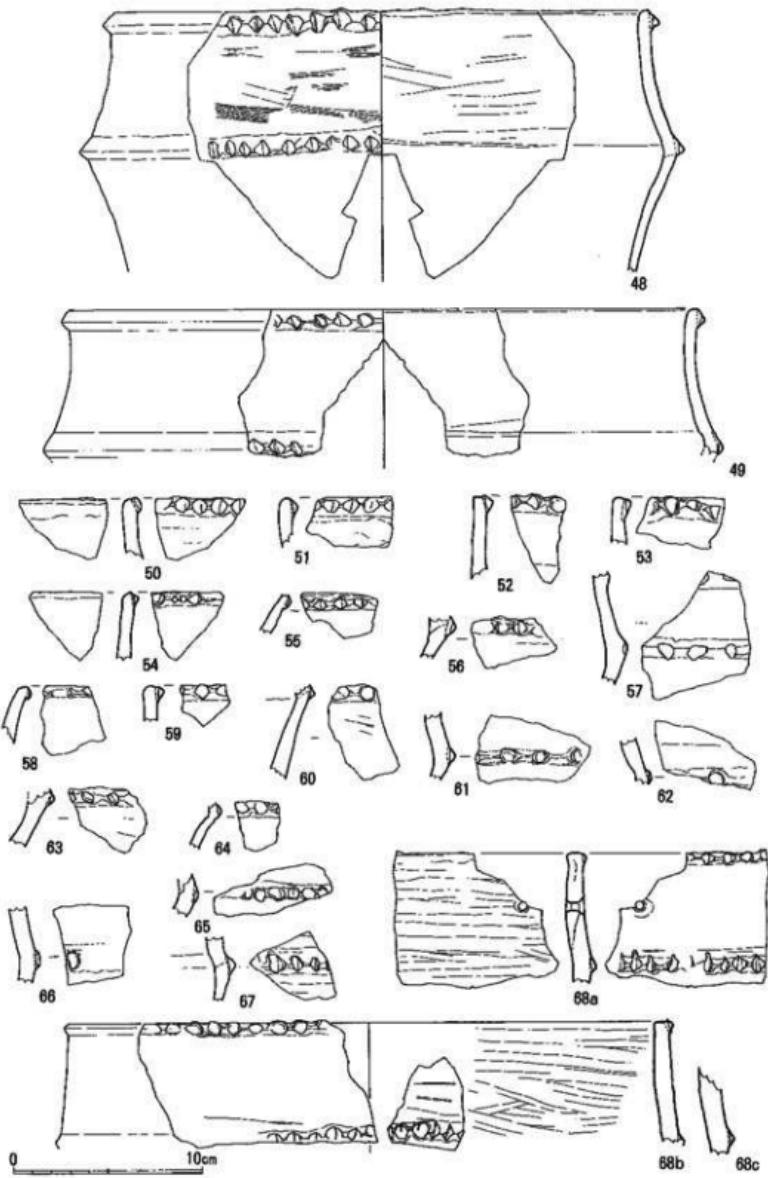


図15 V層出土土器〔第3群・甕〕実測図(2)

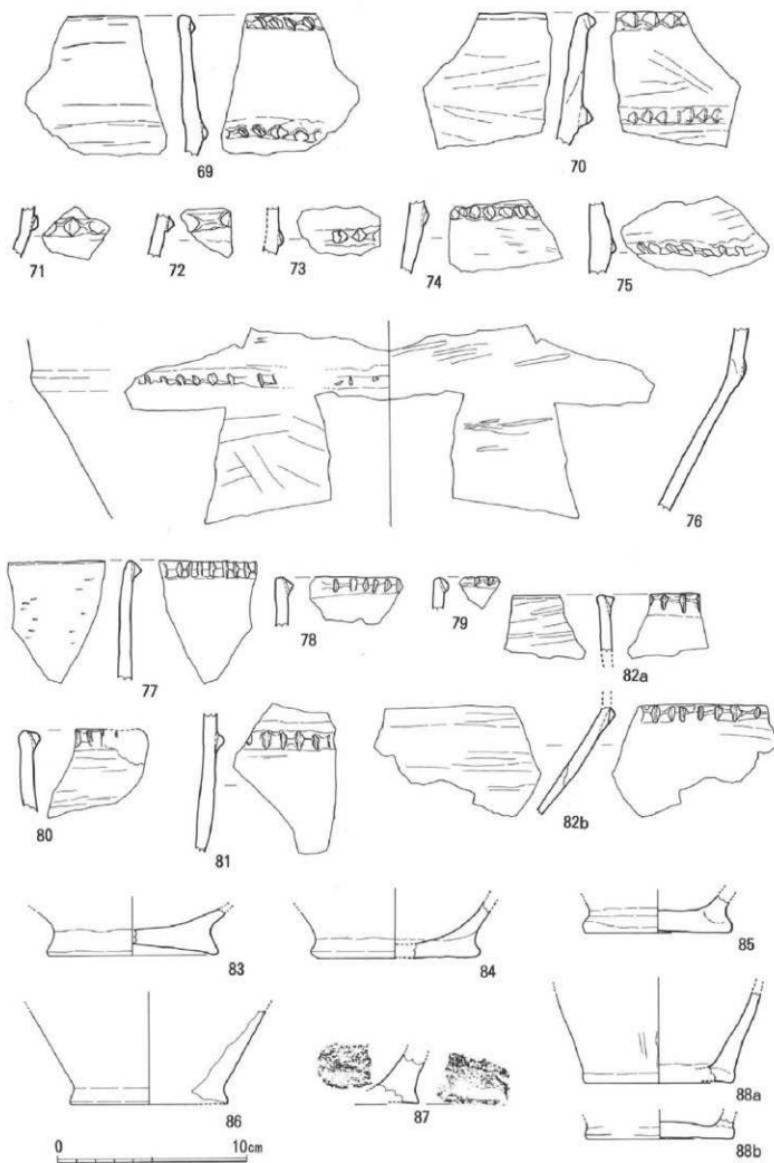


図16 V層出土土器〔第3群・臺〕実測図(3)

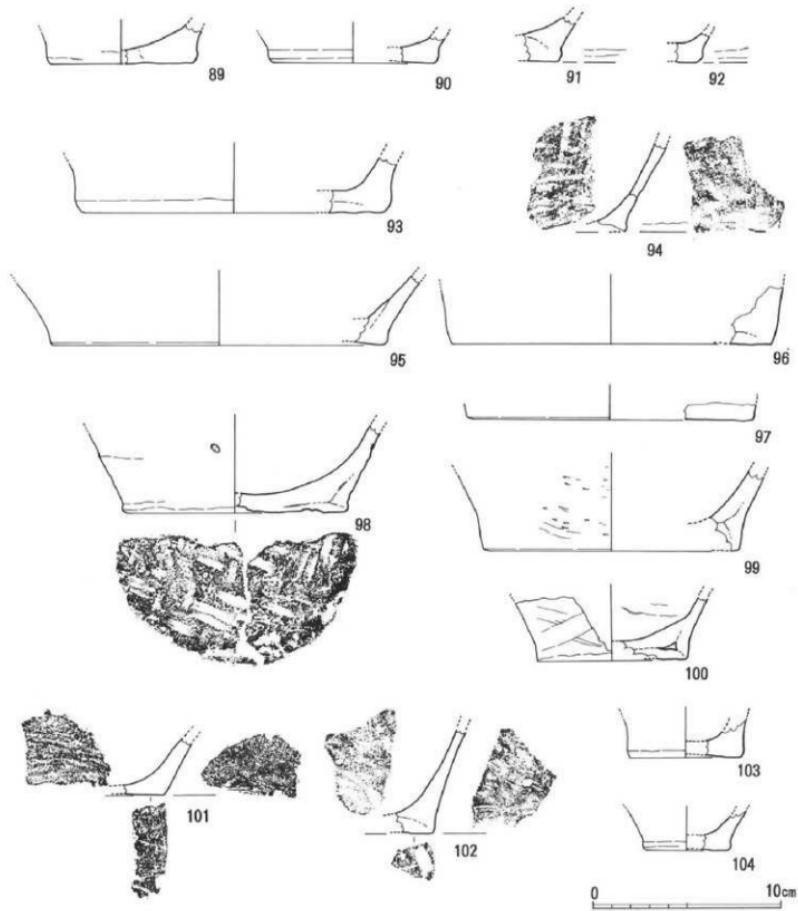


図17 V層出土土器〔第3群・甕〕実測図(4)

図23・24の177~188は壺である。丹塗り研磨されたもの（177~185）と粗いミガキないしナデの施されたもの（186~188）とがある。図化できたのは前者が9個体分で、後者が3個体分である。器外表面の研磨方向は、おおむね横か斜めであるが、177a・181a・181c・186には部分的に縦方向の研磨が認められる。また、180と183bには内面の肩部以下に横方向のケズリが施されている。口縁部は2点（183a・184a）確認されているが、外端部に突帯文が施されている。一方、底部は183cだけで、形態は平底である。177a・178・186には肩部に突帯文が施されている。179が削り出しによるもの以外はすべて粘土帯の貼り付けによるものである。180・183bは内面の胴部以下にケズリ

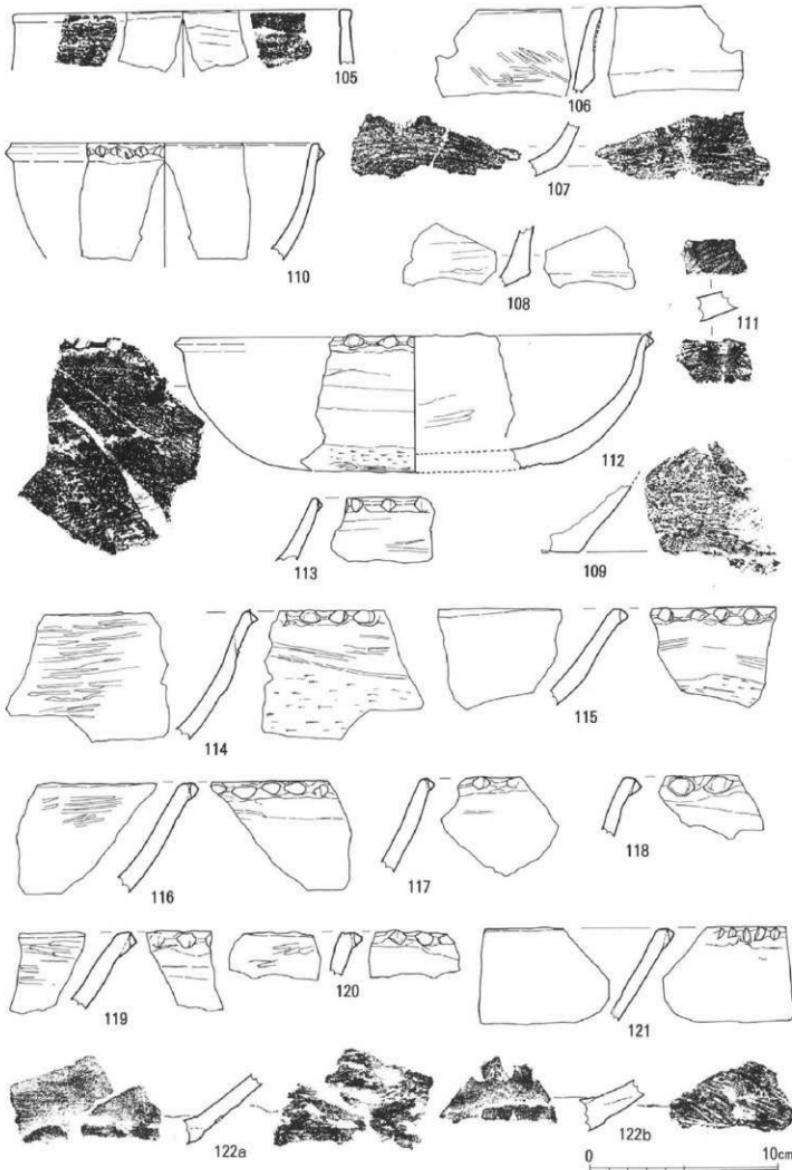


図 18 V層出土土器 [第3群・鉢] 実測図(1)

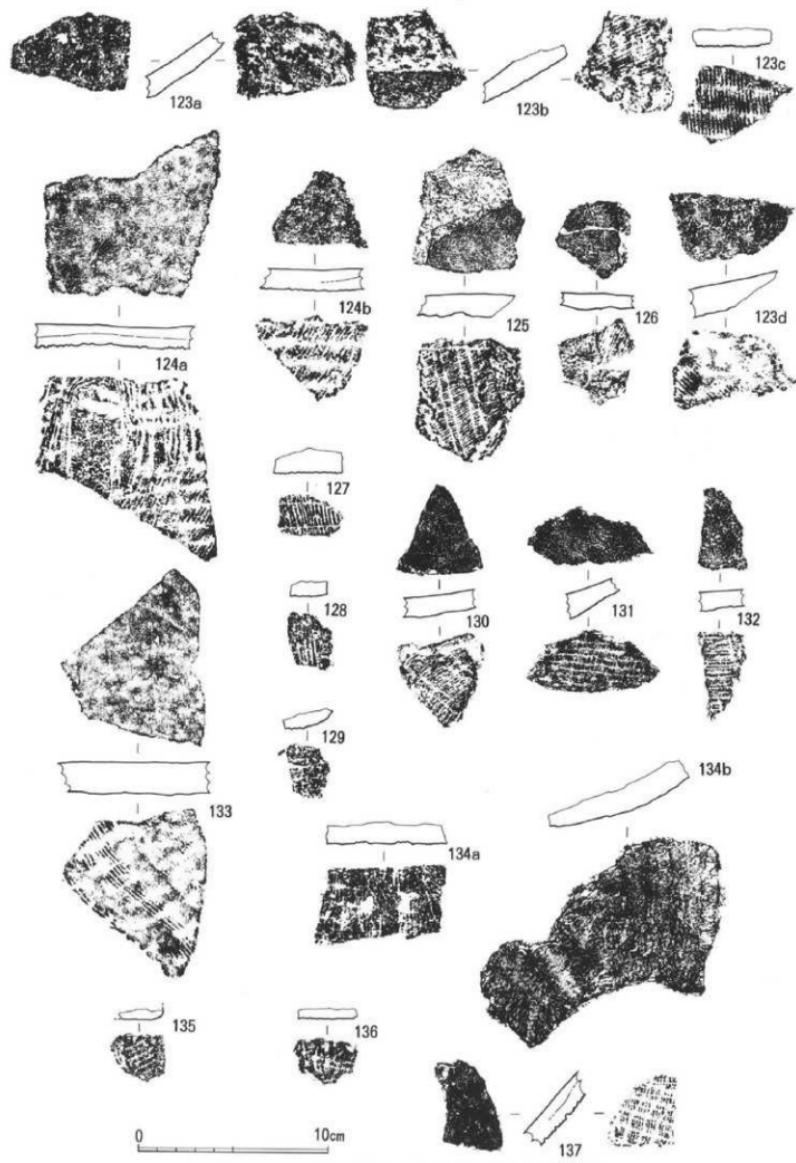


図 19 V層出土土器〔第3群・鉈〕実測図(2)

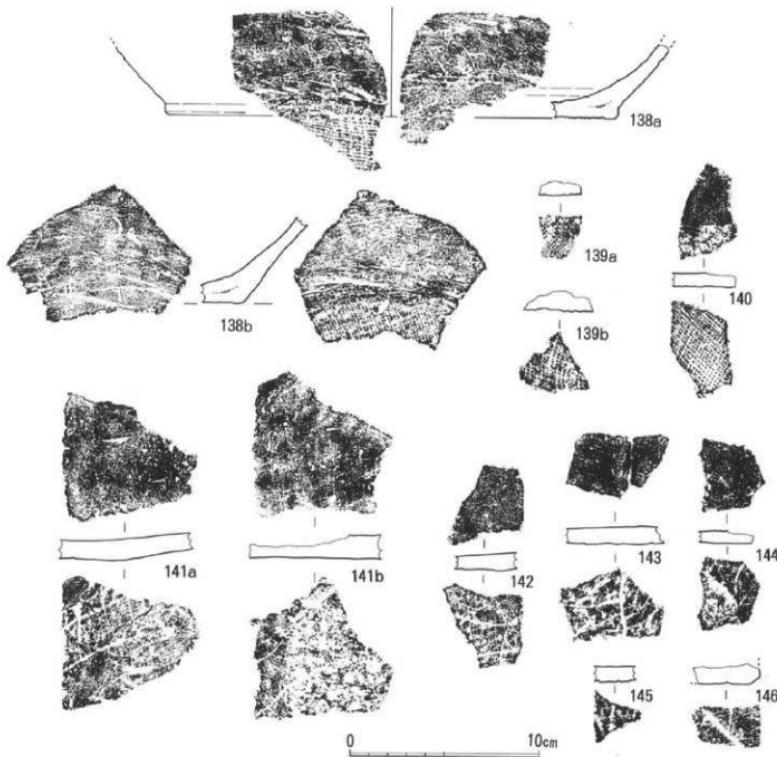


図20 V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図(3)

調整が認められる。なお、丹塗り研磨された土器の胎土は特徴的な橙色を呈し、他との識別が容易である。

図24の189～195は高環と推定される。189a・189b・190a・190b・190c・191・192は口縁部で、190d・193は脚部、194・195は環部と脚部の移行部分である。189a・189b・190aは上から見ると方形を呈し、山形口縁頂部には円形のドーナツ状貼り付け文・刺突文・沈線文が施されている。また外面には2条単位の沈線文が施されており、189a・190aには外面に丹と黒色顔料の塗彩が認められる。

図24の196～201は器種不明なものである。198は無頸壺状の器形を呈するものとおもわれるが判然としない。口縁部に突起が認められ、外面からの焼成前穿孔があり、外面と内面に丹の塗彩が認められる。196は口縁部に刻目突带文が施されており、皿状の器形ととらえたが、あるいは蓋かも

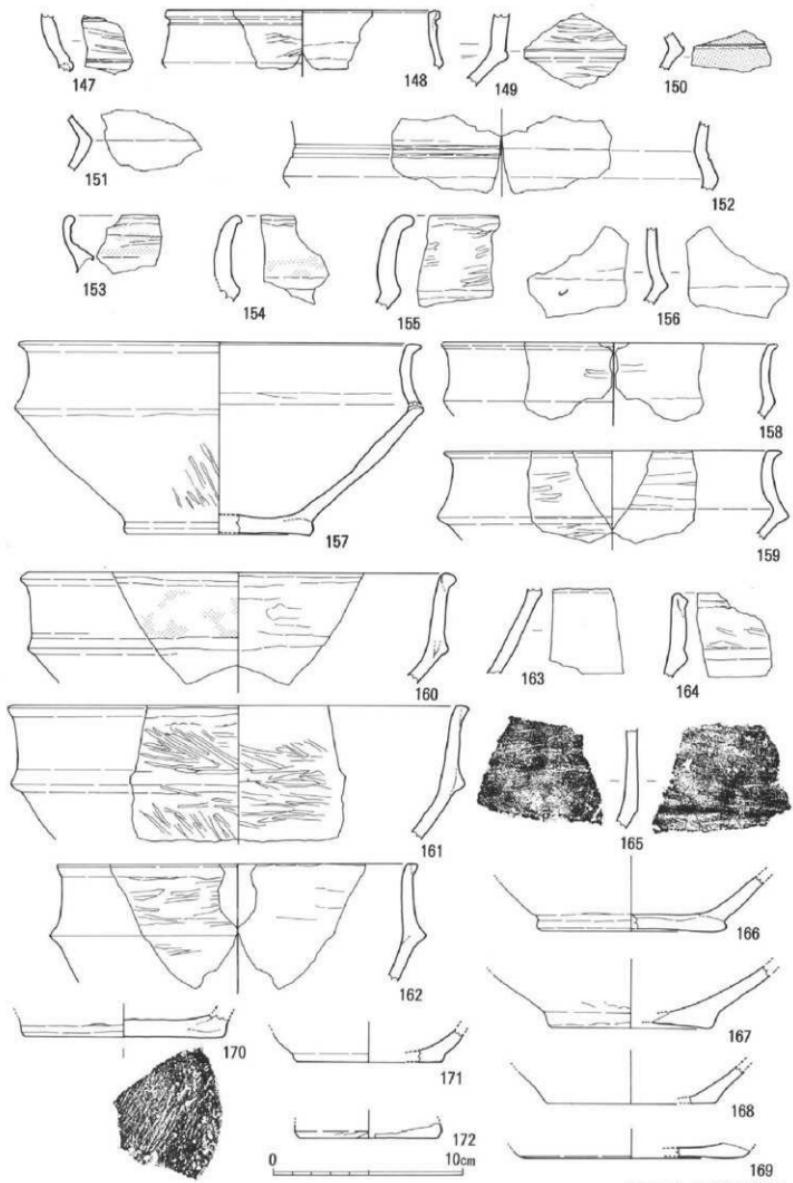


図21 V層出土土器〔第3群・鉢〕実測図(4)

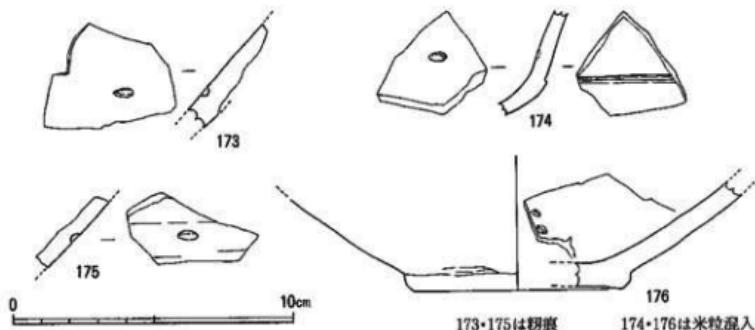


図22 V層出土土器 [第3群・鉢] 実測図(5)

しれない。丁寧に調整された突帯文をもつ199は次の第4群の可能性があるが、黄色系の色調などを考慮し、ここに含めた。200は口縁部が玉縁状を呈する。

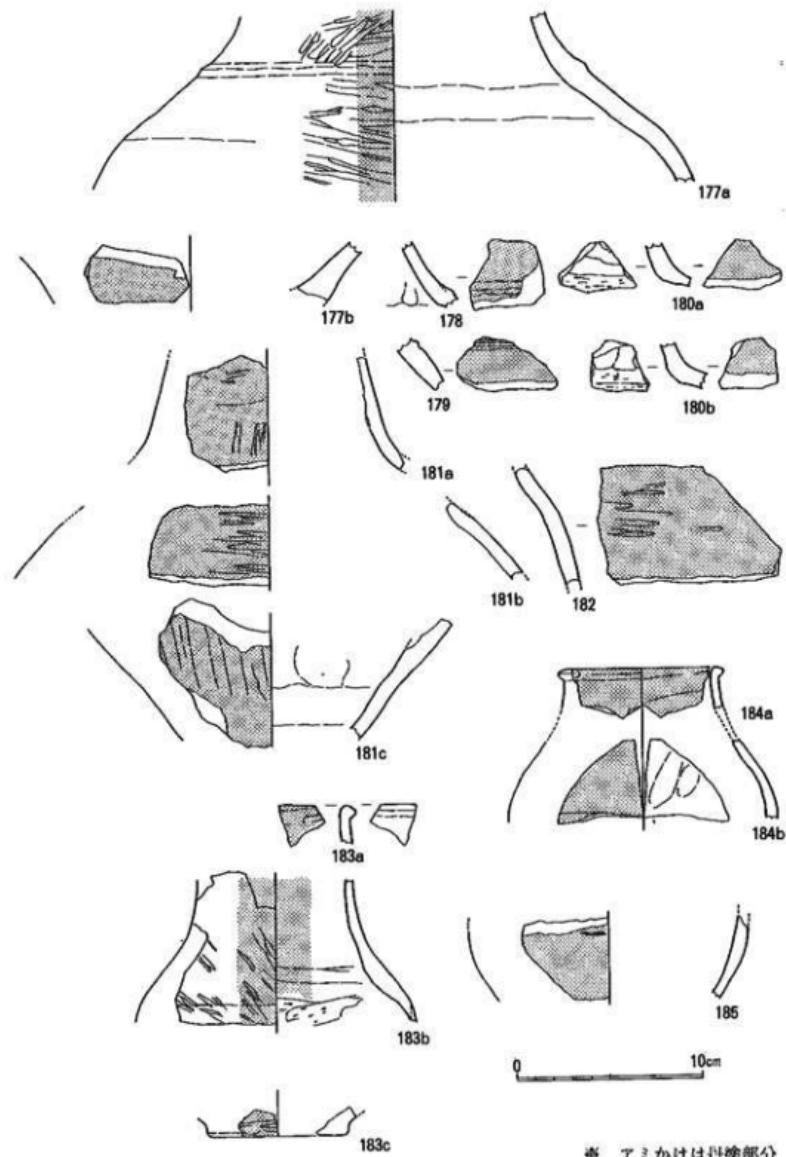
第4群 土器 (図25~図27)

図25の202a~223は刻目突帯文を主文様とする壺である。図化できたものは22個体を数える。213がナデ調整、217・221・222・223の4点にはハケメ調整が認められるが、他はすべて粗いヘラミガキ調整が顕著である。口縁突帯の位置が口唇端部に接するものとやや下がるもの(203~205)とがある。突帯の刻み手法は先端の鋭い工具による深いもの(202・206・210・211・212・214・216)、押し引くようにして断面「V」字状を呈するもの(209)、刺突文状のもの(208)、浅く細かいもの(203・204・205・207・213・215・217・218・219・220・221・222・223)などがあるが、全体的に鋭く粗めのものが多い。222はハケメ原体による刻目が観察される。なお、206は口縁部突帯文の下に斜め方向の突帯文が貼り付けられている。

図26の224~234は突帯文を主文様とする壺であるが、突帯上に刻み目はない。おおよそ10個体を数える。すべて粗いヘラミガキによる調整である。227は口縁部と肩部の突帯文を繋ぐように縱方向の突帯文が貼り付けられている。これらの特徴的なミガキ調整の施された突帯文壺には、胎土中に比較的大きめの砂粒が含まれ、全体的に硬質で重量感がある。

次に上記以外の壺について説明するが、出土点数は掲載したものに限られる。235は口縁部を折り曲げることによって逆「L」字状の口縁形態を作りだし、その口唇端部全面に刻印が施されている。236は口縁端部を内面と外面の両方につまみ出して外面端部に浅く細かい刻目が施されている。外面の口縁部直下には板状工具による調整痕が残る。器壁が薄く、胎土も他の土器と異なるため移入土器と考えられる。

確実にこの時期といえる底部資料が少ない中で、全体的に肉厚な237はその胎土上の特徴と調整に粗いミガキが観察されることからこの時期の壺の底部と判断した。



秦 アミかけは円塗部分

図23 V層出土土器〔第3群・壺〕実測図



図24 V層出土土器〔第3群・壹その他〕実測図

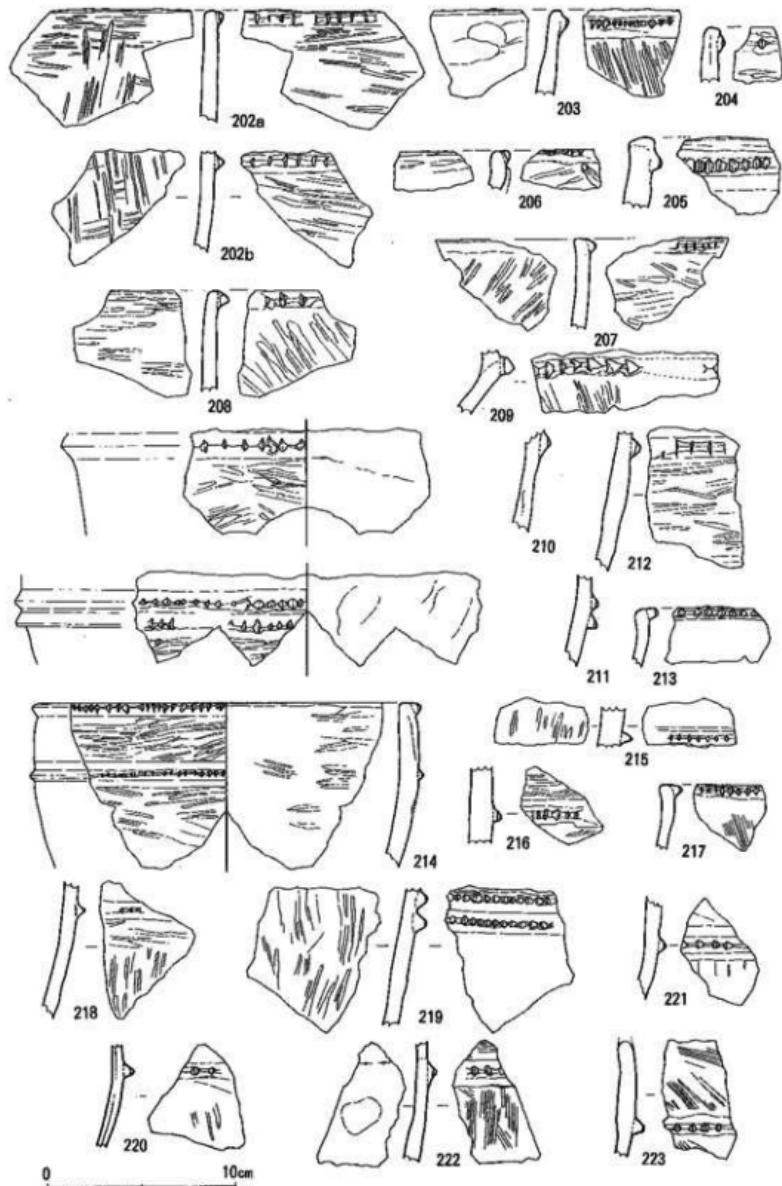


図 25 V層出土土器【第4群・匙】実測図(1)

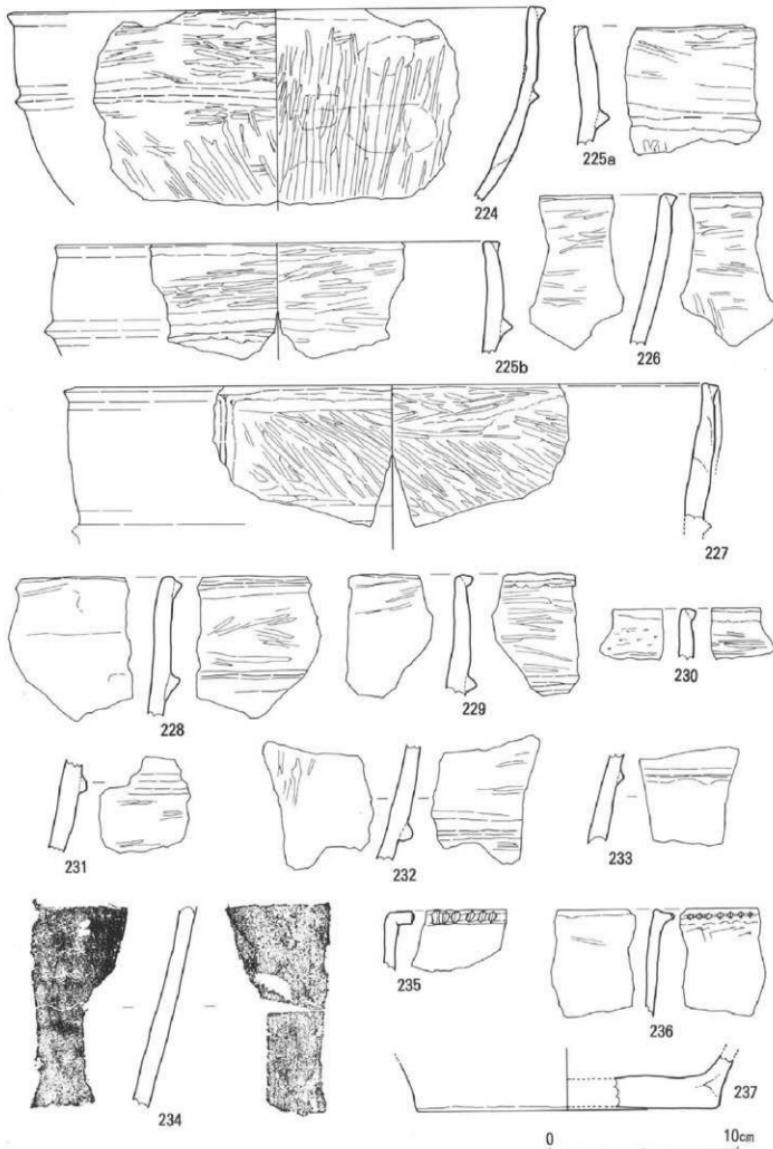


図2-6 V層出土土器〔第4群・壺〕実測図(2)

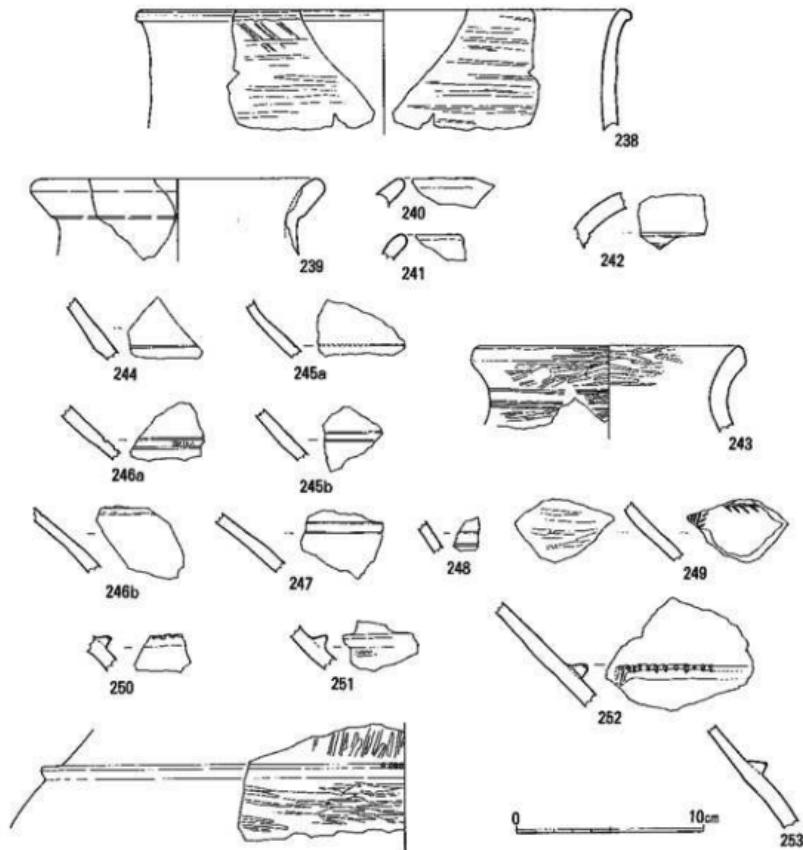


図27 V層出土土器〔第4群・壺〕実測図

図27の238は鉢形と思われるが、判然としない。橙色系の色調からこの項に含めた。器内外ともに調整の際の工具痕が条線状に残る。

図27の239～253は壺である。圓化できたものは15個体を数える。口縁部を肥厚させるもの(239)、単純口縁のもの(240・241)、頸部に2～3条程度の沈線文をもつもの(242・243)、肩部に2条の沈線文をもつもの(244～249)、肩部に一条の突帯文をもつもの(250～253)などがある。243は頸部に3条の沈線をもち、口頸部の短い形態であるが、胎土は比較的大きめの砂粒を含み、先述した粗いミガキ調整の壺に類似する。252には突帶上に大きい刻目と細かい刻目が施されている。また、253は突帶上に細かい刻目が部分的に施されている。なお、249には有軸羽状文的な沈線モチーフが

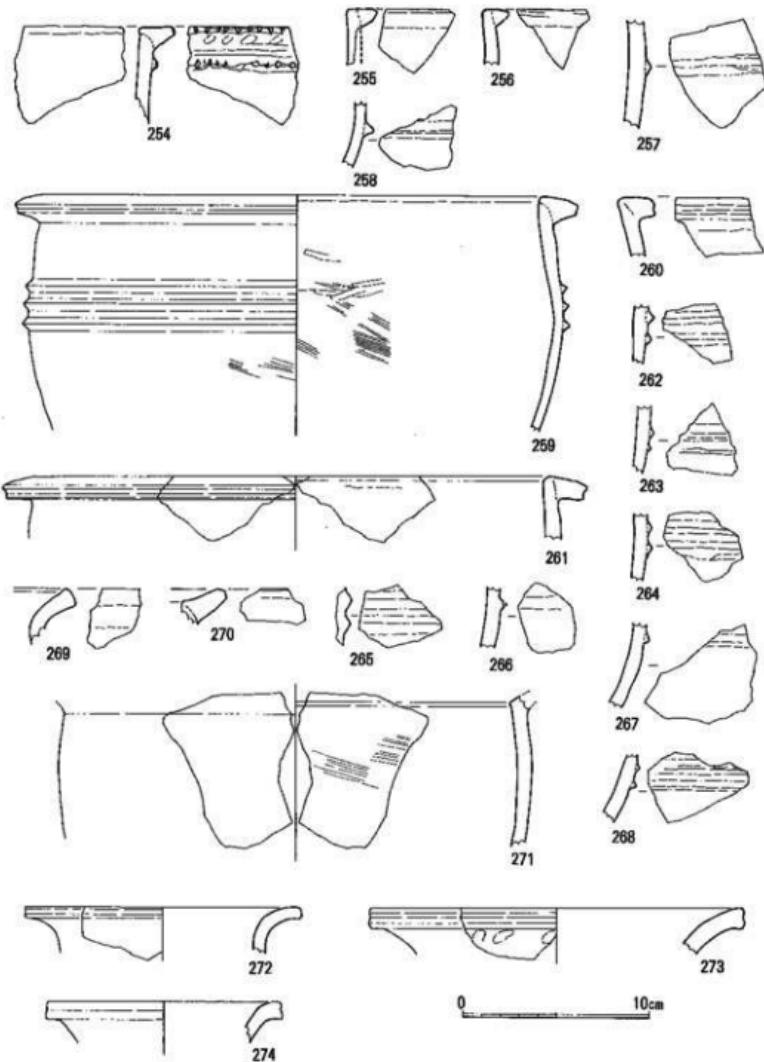


図28 V層出土土器〔第5群〕実測図

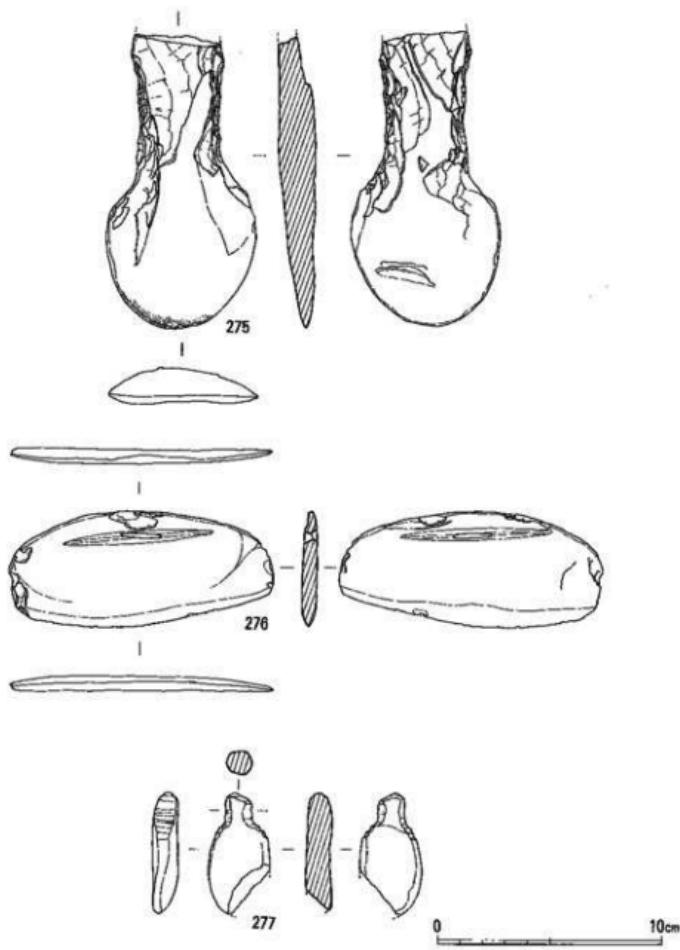


図29 V層出土石器実測図

認められ、内面にも丁寧なミガキ調整がみられる。なお、肩部に刻目突帯文をもつ壺は遺構の項目で説明したように堅穴住居跡の覆土中から単独で出土している(3)。

第5群 土器(図28)

図28の254~268は壺で、図化できたものは18点である。壺の口縁は三角形突帯をもつもの(254~256)、「M」字状突帯をもつもの(259~261)、「く」の字に折れ曲りや立ち上がるもの(269~

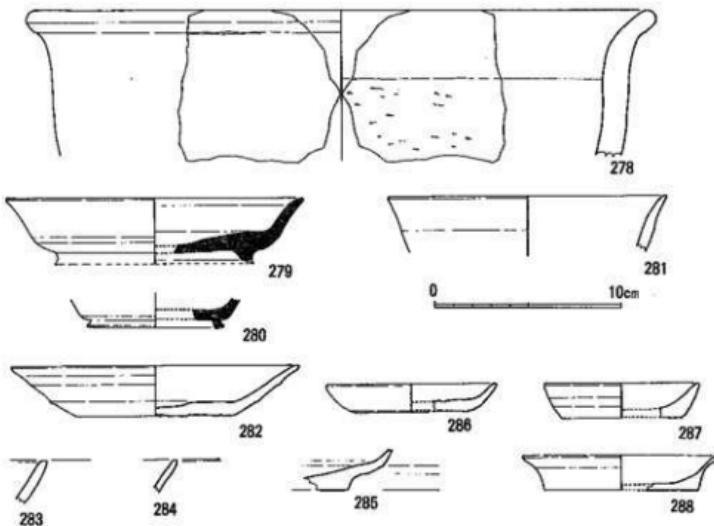


図30 IV層出土土器実測図

271)などがある。254は口縁部に大きな三角突帯をもち、そのすぐ下に小さい突帯がある。胎土にキンウンモを含む。259は口縁部にやや垂れ下がり気味の「M」字状突帯をもち、胴部には三条の三角突帯がめぐっている。器面調整は外面下半に若干のハケメが、内面にハケメとミガキが採用されているが、最終調整はナデである。なお、259～267・270は胎土にキンウンを含む。

272～274は壺で、図化できたものは3点である。272～274はいずれも口縁部が外反し、口唇部は強くヨコナデされることによって四線状にくぼんでいる。

2) V層出土石器

図29の275～277は調査区域の南側のV a層中から出土した石器である。周辺から出土した土器は先述した第3群・刻目突帯文土器が主体であり、このグループに共伴するものと考えられる。

275はG-14区・V a層から出土した石製土掘り具である。石材は頁岩性のホルンフェルスである。基端部を欠失するが、平面形は「しゃもじ」状を呈しており、基部は比較的大きな整形剥離の後に、側縁が入念に敲打され、細長い柄部が作り出されている。実測図左面の刃縁部には斜め方向の線条痕が認められ、刃部は全体的に使用による摩滅が著しい。また、実測図右面の基部中央には木柄などへの装着によって生じたと思われる光沢がある。現存全長13cm・刃部最大幅6.5cm。

276は石窓臼である。F-12区において、現代の耕作機械のトレンチャーによって若干傷付けられ、倒立した状態で検出されたが、ほぼV a層を原位置と認めてよい出土状況であった。長軸11.8cm・短軸5.2cmの平面形は整わない椭円形を呈し、厚さ0.6cmを測る。石材は頁岩性のホルンフェルスであり、研磨によって偏平に加工されているが、横長の剥片を利用したために全体にやや湾曲し

ている。両面からの擦り切りによって長さ1.7cm・幅0.25cmの細長い穴が背面に沿って並行にあけられている。刃の断面形は両刃であるが、その形状は二等辺三角形ではない。

277はF-12区・Va層から出土した穿孔具である。砂岩製で、黄褐色を呈している。基部は実測図右面中央がややへこんでおり、砥石としての使用も考えられる。先端部の両側縁に回転による磨耗痕がみられる。現存長5.5cm・最大幅2.8cm・先端部径1.2cmを測る。

3) IV層出土土器

調査の経過と概要で触れたように、北区ではIV層中から平安時代～中世の遺物が検出された。図30の279・280は須恵器壺であり、279は高台先端を欠失している。278は内面をヘラ削りされた土師器壺である。口縁部は軽く外反し、端部は丸くおさまる。281・283・284は土師器壺である。これらはおおむね8世紀後半から9世紀代に位置づけられる。282・286は土師器壺と小皿である。

288は底部が糸切り離しの小皿であり、薄く仕上げられているが、比較的堅緻である。12世紀代に位置づけられる。

土器観察表の記載について

1. 図番号は報告書中記載番号。
2. 色調名は『新版標準土色帖』を参考にした。また、煤の付着しているものについては「ヌス付着」と注記し、丹塗りについても付記した。
3. 器面調整については次の略号を用い、調整方向はカタカナで付記した。

ナデ=N

丁寧なナデ=TN

ケズリ=K

条痕=J

ミガキ=M

ハケメ=H

4. 胎土中に含まれる混和材の大きさは次のように分類し特徴的な鉱物・粒子については注記した。

粗=2mmより大きいもの

並=2mm以下、0.5mmより大きいもの

細=0.5mm以下

5. 取上番号とは現場における遺物番号

表1 土器観察表(1)

図番号	出土区	遺構・層	器種	色		箇		箇		胎土・ 記和材	取上 番号	備考
				外	内	外	内					
1	G-H-7	堅穴住居	甕	褐色～赤褐色 (スス付着)	淡黄	ヨコN	ナナメN	並	1207	突唇割落		
2	G-H-7	堅穴住居	甕	にぶい赤褐色 (炭化物付着)	褐色～深褐色 (炭化物付着)	タテ工具N	N	粗	1212			
3	G-H-7	堅穴住居	甕	黒	浅黄	ヨコM	タテのちヨコM	細	1211,1226 1233,1241	外面黒焼?		
4	F-G-5	土坑	甕	にぶい褐～橙	橙	TN・M H(日本) H(スス付着)	TN	淡・ウンモ	120,1291			
5	G-5	土坑	甕	浅黄橙	浅黄橙	N	N	並				
8	D-E-5	V	深鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコN	N	並	45,57 1185,1106			
9	G-5	V	深鉢	にぶい橙	にぶい橙	ヨコTN	N	並	186			
10	F-15	V	深鉢	にぶい赤褐色	にぶい黄褐色	ヨコ工具N	ヨコ工具N	細	691			
11	O-15-13	V	深鉢	黒褐(スス付着)	黒褐	ヨコM	ヨコTN	細	329,338 335			
12	G-5	V	深鉢	褐	褐	ヨコTN	N	細	1276			
13	D-12	V	深鉢	にぶい褐(スス付着)	にぶい赤褐色	ヨコM	ヨコM	並	331			
14	F-5	V	深鉢	にぶい黄橙	黒褐	N	タテのちヨコM	並	1151			
15	G-15	V	深鉢	にぶい黄褐色	黄褐	M	M	粗	585,599			
16	G-15	V	深鉢	にぶい黄褐色	明赤褐	ヨコTN	N	並	602			
17	D-13	V	深鉢	にぶい赤褐色	褐	ヨコM	N	並	397,398			
18	D-13	V	深鉢	にぶい褐(スス付着)	黒	ヨコM	ナナメM	細	341,342			
19a	G-15	V	深鉢	後にぶい褐(スス付着)	明褐	ヨコTN	ヨコN	細	593,594			
19b	G-15	V	深鉢	後にぶい褐(スス付着)	明褐	ヨコTN	ヨコN	細	597,606 613			
20	G-8	V	深鉢	暗灰青(スス付着)	淡黄	ヨコN	ヨコTN	並	1008			
21	D-5	V	深鉢	灰(スス付着)	淡黄	ヨコJ・ヨコN	ヨコN	並	12			
22	D-15	V	深鉢	灰黄褐	灰黄褐	ヨコN	ヨコN	並	1062,1160			
23	D-15	V	深鉢	明褐灰	明褐灰	ヨコN	ヨコN	並	1176			
24	G-8	V	深鉢	浅黄橙	褐灰	N	N	粗	1002			
25	D-14	V	深鉢	にぶい黄橙		N		並	432			
26	D-13	V	鉢	灰・薄青(スス付着)	灰白・灰	ヨコK	ヨコM・タテM	並	276,377 378,378			
27	表 採		浅鉢	灰黄褐	灰黄褐	ヨコM	ヨコM	細				
28	G-8	V	浅鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコM	ヨコM	細	1003			
29	D-13	V	浅鉢	にぶい橙	淡黄	ヨコM	ヨコM	細	422			
30	D-13	V	浅鉢	浅黄橙	にぶい橙	ヨコM	ヨコN	細	422			
31a	D-13	V	浅鉢	にぶい橙	にぶい橙	ヨコM	ヨコM	細	425,429			
31b	D-13	V	浅鉢	にぶい橙	にぶい橙	ヨコM	ヨコM	細	429			
32	G-14	V	浅鉢	褐	黒	ヨコM	ヨコM	細	567			
33	G-W-D-11	V	甕	にぶい黄褐色(スス付着)	淡黄	ヨコN	ヨコN	並	419,538	内部切腹		
34	F-12	V	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコN	ヨコK	並	778			
35	G-13	V	甕	にぶい黄褐色(スス付着)	にぶい黄褐色	ヨコN	ヨコTN	細	964			
36	F-G-H-5	V	甕	にぶい黄褐色	淡黄	ヨコN	N	細				
37	F-12	V	甕	淡黄橙	にぶい黄褐色	ヨコN	ヨコN	細				
38	F-12	V	甕	褐灰	浅黄	ヨコN	ヨコ工具N	並	771			
39	G-1944 F-12	V	甕	にぶい黄褐色(スス付着)	淡黄	ヨコN	ヨコN	細	517,878			
40a	F-12	V	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコN	ヨコN	並	772			
40b	F-12	V	甕	にぶい黄褐色(スス付着)	にぶい黄褐色	ヨコN	ヨコN	並	805			
40c	F-12	V	甕	にぶい黄褐色(スス付着)	灰黄褐	ナナメN	ヨコN	並				
41a	E-13	V	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヨコN	ヨコN	細	349,352			
41b	F-12	V	甕	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	N	ヨコN	細	797			
42	F-12	V	甕	にぶい褐	にぶい褐	N	ヨコN	細	1056			
43a	G-10	V	甕	にぶい黄褐色	淡黄褐	ヨコN	ヨコN	並	1163			
43b	G-10	V	甕	にぶい黄褐色	淡黄褐	ナナメN	ヨコN	並	1030			

表2 土器観察表(2)

器番号	出上区	遺構・層	器種	色調		色調		胎土・ 混和材	取上 番号	備考	
				外	内	外	内				
44	表 採		甕	灰灰(スス付着)	暗灰黄	ヨコN	ヨコN	並			
45	H - 5	V	甕	灰黄色(スス付着)	淡黄色	ヨコN	ヨコN	並	1146		
46	G - 13	V	甕	褐灰	灰黄褐	ヨコN	ヨコN	並	971		
47	G - 14	V	甕	灰褐(スス付着)	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	497		
48	G - 14	V	甕	上:にぶい褐 下:灰灰	にぶい黄褐	ヨコ工具N	ヨコ工具N	並	475,480		
49	F - 12	V	甕	灰白・灰	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	707		
50	G - 12	V	甕	褐褐	にぶい褐	ヨコN	N	並	700		
51	F - 12	V	甕	灰・植	植	ヨコN	N	並	859		
52	F - 12	IV	甕	にぶい黄褐	灰灰褐	ヨコN	ヨコN	並			
53	F - 13	I	甕	褐灰(スス付着)	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコTN	並			
54	F - 12	I	甕	褐灰	明褐灰	ヨコN	ヨコN	並	831		
55	F-G 14-15	V	甕	にぶい黄褐	浅灰褐	ヨコN	N	並			
56	G - 14	V	甕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	N	ヨコ工具N	並			
57	G - 14	V	甕	にぶい黄 (スス付着)	淡黄	N	N	並		全体的に摩滅	
58	G - 15	V	甕	にぶい黄褐	浅灰褐	ヨコN	N	並	596		
59	F - 12	IV	甕	明褐褐(スス付着)	浅黄	ヨコN	ヨコM	細			
60	F - 12	V	甕	にぶい褐	にぶい褐	ヨコ工具N	ヨコ工具N	並	854		
61	G - 13	V	甕	にぶい褐	浅灰褐	ヨコN	ヨコN	並	950		
62	F - 12	IV	甕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並			
63	F - 12	V	甕	灰褐	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	755		
64	F-G 10-11	IV	甕	淡黄	淡黄	N	N	並			
65	F - 12	V	甕	淡黄	浅黄褐	N	ヨコN	並			
66	H - 5	V	甕	淡黄(スス付着)	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	280		
67	H - 6	V	甕	淡黄	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	317		
68a	F - 12	V	甕	褐灰(スス付着)	にぶい褐	N	ヨコ工具N	並	754	補修孔	
68b	G-14 F-15	V	甕	にぶい褐	褐	ヨコN	ヨコ工具N	並	504,507 606		
68c	F - 12	V	甕	灰褐(スス付着)	褐灰	ヨコN	ヨコ工具N	並	820		
69	F - 12	V	甕	灰黄	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコ工具N	並	820		
70	G - 13	V	甕	褐灰(スス付着)	灰白	ヨコN	ナナメN	ヨコ工具N	並	960	
71	E - 5	V	甕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヨコN	N	細			
72	F - 12	V	甕	にぶい褐	にぶい褐	N	ヨコN	細			
73	E - 12	V	甕	にぶい褐		ヨコN		並	866		
74	G - 13	V	甕	にぶい褐 (スス付着)	灰黄褐	ヨコN	ヨコN	並			
75	F - 12	V	甕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並			
76	D - 13	IV+V	甕	上:褐灰 下:にぶい黄褐	褐灰・灰 にぶい黄褐	ヨコ工具N ヨコ工具N	ヨコTN	並	423 424	破壊トレス	
77	G - 13	V	甕	灰褐(スス付着)	灰褐	ヨコN	ヨコK	並	959		
78	F - 12	V	甕	にぶい褐 (スス付着)	にぶい褐	ヨコN	ヨコTN	細			
79	F - 12	V	甕	にぶい褐	にぶい褐	ヨコN	ヨコN	細			
80	F - 12	I	甕	にぶい褐 (スス付着)	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	786		
81	G - 13	V	甕	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコN	並	927		
82a	F - 12	V	甕	褐灰(スス付着)	にぶい黄褐	ヨコN	ヨコ工具TN	細	807		
82b	D-15 F-J2	I-IV+V	甕	褐灰(スス付着)	にぶい黄褐	ヨコ工具N	ヨコ工具N	細	836,1177		
83	E - 12	I+V	甕	灰白	浅黄褐	ナナメN	N	細	861,863		
84	G - 8	V	甕	にぶい褐	褐灰	N	N	並	1000		
85	F - 12	V	甕	にぶい黄褐	灰白	ヨコN	N	細	755		
86	F - 13	V	甕	褐灰(スス付着)		ヨコN		並	593		
87	E - 4	V	甕	灰白	灰白	タテN	N	並	76		

表3 土器観察表(3)

図面番号	出土地	遺構・層	器種	色		形		胎土・ 質和材	底上 番号	備考
				外	内	外	内			
88a	F - 12	V	甕	にぶい黄橙	灰白	タテN	N	並	733	
88b	F - 12	V	甕	褐灰色	黒褐色 (炭化物付着)	N	N	並	706	
89	G - 8	V	甕	にぶい橙	にぶい黄橙	ヨコN	TN	並	997	
90	E - 12	I	甕	淡赤橙	褐灰 (炭化物付着)	N	N	細	874	
91	F - 12	V	甕	灰白(スス付着)	炭化物付着	N	N	細		
92	F - 12	V	甕	淡赤橙	灰白	N	N	細		
93	G - 13	V	甕	灰黄褐 (スス付着)	褐灰	N	N	並	932	
94	D - 5	V	甕	明褐灰	灰白	タテN	N	並	13	
95	G - 8 E - 12	I・V	甕	淡赤橙	明褐灰	N	N	並	999,857	
96	G - 13	V	甕	にぶい黄橙		タテN		並	931	
97	G - 13	V	甕	にぶい橙		N		並	967	
98	E - 12 G - 14	V	甕	淡黄	褐灰 (炭化物付着)	N	N(炭化物付着)	並	590,872	網布底・上面無
99	G - 14	V	甕	にぶい黄橙	褐灰 (炭化物付着)	ヨコN	N(炭化物付着)	並	561	
100	F - 15	V	甕	にぶい黄橙	淡黄	ナナメN	N	並	648	
101	F - 12	I	甕	明褐灰	褐灰 (炭化物付着)	N	ヨコN	並	819	底面木葉压痕
102	F - 12	V	甕	赤橙	褐灰 (炭化物付着)	N	N	細	756	"
103	G - 14	V	小形甕	浅赤橙	褐灰 (炭化物付着)	N	N	並	525	
104	F - 12	V	小形甕	明褐灰	にぶい橙	N	N	並		
105	G - 14・15	V	鉢(?)	黒(スス付着)	にぶい黄橙	N	ヨコN	並		
106	G - 14	V	鉢	明褐灰 (スス付着)	にぶい橙 (炭化物付着)	N	ヨコ・ナナメM	細	571	
107	F - 12	V	鉢	にぶい黄橙 (スス付着)	にぶい黄橙 (炭化物付着)	ヨコN	ヨコN	並	837	
108	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙 (スス付着)	にぶい黄橙	ヨコN	ヨコTN	並	542	
109	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙		N		並	901	
110	G - 14	V	鉢	甕(スス付着)	甕(炭化物付着)	N・K	ヨコM	並	477	
111	E - 12	V	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	N	ヨコM	並	849	編布压痕
112	E - 12	V	鉢	上: 淡灰 下: 深灰(炭化物付着)	にぶい黄橙 (スス付着)	ヨコN・K	ヨコTN	並	870	"
113	F - 12	V	鉢	にぶい黄橙 (スス付着)	灰	ヨコN・K	ヨコTN	並	724	
114	G - 14 F - 12	V	鉢	上: 淡灰 下: にぶい青褐色	にぶい青褐色 (スス付着)	ヨコN・K	ヨコM	並	557,790	
115	F - 12	V	鉢	灰黄褐	にぶい黄橙	ヨコN・K	ヨコTN	並	778	
116	F - 12	V	鉢	黒褐(スス付着)	明褐灰	ヨコN・K	ヨコM	並	810	
117	F - 12	I	鉢	明褐灰	明褐灰 (炭化物付着)	ヨコK	ヨコN	並	787	
118	F - 12	V	鉢	にぶい橙	にぶい橙	ヨコN	ナナメN	並		
119	G - 5	V	鉢	にぶい橙	にぶい橙	ヨコN	ヨコM	並	1150	
120	D - 5	V	鉢	暗褐(スス付着)	黒(炭化物付着)	ヨコN	ヨコM	並		
121	F - 12	I	鉢	にぶい黄橙 (スス付着)	にぶい黄橙	ヨコN	TN	並	696	
122a	F - 12	IV	鉢	明褐灰 (スス付着)	灰褐	ヨコN	ヨコM	並	727,822	
122b	F - 12	I	鉢	明褐灰 (スス付着)	灰褐	ヨコN	ヨコM	並	821	
123a	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙	灰褐	ヨコK	N	並	575	網布压痕 ヨコ本・cm
123b	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙	浅黄褐	ヨコK	N	並	546	網布压痕 ヨコ本・cm タテ5.5cm
123c	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙				並	548	網布压痕
123d	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	TN		並	547	網布压痕
124a	G - 14	V	鉢	褐	にぶい橙	N		並	491	網布压痕 ヨコ本・cm タテ2.5・5cm
124b	G - 14	V	鉢	にぶい黄橙	褐灰	N		並	902	網布压痕
125	F - 11	V	鉢	淡黄	灰黄	M		並	1045	網布压痕 ヨコ本・cm タテ4.1cm
126	F - 12	V	鉢	浅黄	灰黄	N		並		網布压痕 ヨコ本・cm タテ3cm
127	E - 12	V	鉢	灰黄褐				並	852	網布压痕 ヨコ本・cm タテ3cm
128	F - 12	IV	鉢	にぶい黄橙				並		網布压痕 ヨコ本・cm

表4 土器観察表(4)

図番号	出土区	遺構・層	器種	色		調		外 内	外 内	粘土・ 混和材	取上 番号	備 考
				外	内	外	内					
129	D - 13	V	鉢	褐灰(スス付背)		K				並	430	編布庄痕
130	F - 15	V	鉢	浅黄	淡黄				TN	並	626	編布庄痕 ミツカ/ミツカ1号
131	F - 15	V	鉢	にぶい橙	にぶい黄橙				N	並	679	編布庄痕 ミツカ/ミツカ2号
132	D - 14	V	鉢	淡黄	灰黄				N	並	462	編布庄痕 ミツカ/ミツカ3号
133	G - 14	V	鉢	灰白	にぶい黄橙	K	M	並	562	編布庄痕 ミツカ/ミツカ4号		
134a	E - 12	V	鉢	にぶい黄橙				K		並	856	編布庄痕
134b	E - 12	V	鉢	にぶい黄橙		ヨコK				並	731,732	編布庄痕
135	F+G F+G 10+11	IV	鉢	橙		N				並		編布庄痕
136	F - 12	IV	鉢	橙						並		網目庄痕?
137	G - 15	V	鉢	にぶい黄橙	にぶい橙				TN	粗	619	平織+網目
138a	E - 12	V	鉢	にぶい橙 (スス付背)	にぶい黄橙	ヨコN	ヨコN	並	720,854	平織庄痕		
138b	F - 12	V	鉢	にぶい橙	淡黄	ヨコN	ヨコN	並	726	平織庄痕		
139a	G - 13	V	鉢	にぶい橙				N		並		平織庄痕
139b	F - 12	IV	鉢	にぶい黄橙						並		平織庄痕
140	E - 12	I	鉢	にぶい黄橙	褐灰			M		並	856	平織庄痕
141a	F - 5	V	鉢	にぶい黄橙 (スス付背)	褐灰	N	N	並		木葉庄痕		
141b	D - 5	V	鉢	にぶい黄橙 (スス付背)	褐灰	N	N	並	36	木葉庄痕		
142	F - 4	V	鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	N	TN	並	573	木葉庄痕		
143	D-5F-5	IV+V	鉢	橙	褐灰	N	N	並	43	木葉庄痕		
144	F - 5	IV	鉢	にぶい黄橙	灰黄	N	N	並		木葉庄痕		
145	F - 5	IV	鉢	にぶい黄橙	褐灰	N	TN	並		木葉庄痕		
146	H - 5	V	鉢	にぶい橙		N				並	271	木葉庄痕
147	G - 10	V	精製鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコM	ヨコN			細		
148	E - 12	V	精製鉢	灰褐	淡黄褐	ヨコM	N			粗	855	
149	G - 14	V	精製鉢	浅黄褐	にぶい橙	ヨコM	ヨコTN	並	478			
150	E - 5	V	精製鉢	灰白・褐色	褐灰	ヨコTN	ヨコTN			丹塗		
151	F - 12	IV	精製鉢	にぶい黄橙	淡黄	TN	N			並		
152	F - 12	IV	精製鉢	にぶい黄橙		N				細		
153	F+G 14-15	V	精製鉢	明褐色	ヨコN	N				並		丹塗
154	G - 5	V	精製鉢	にぶい黄橙	淡黄	ヨコTN	ヨコTN			細	221	丹塗
155	G - 5	V	精製鉢	にぶい黄橙 (スス付背)	淡黄	ヨコM	ヨコN			細	1258	
156	D - 13	V	精製鉢	にぶい橙	にぶい橙	ヨコN	ヨコTN	並	411	米澤入?		
157	F - 12	V	精製鉢	橙	淡黄	ヨコN+M	ヨコN			細	701,1060	鹿臘口量方挽跡?
158	F - 12	I	精製鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコTN	ヨコTN	並	821			
159	E - 12	I	精製鉢	にぶい橙	にぶい黄橙	ヨコTN	ヨコM	並	843,844			
160	E - 13 F - 13	V	精製鉢	灰白-にぶい褐 (スス付背)	淡黄	N	ヨコN	並	791,881	丹塗		
161	G - 14	V	精製鉢	にぶい橙 (スス付背)	灰白	上:ヨコM 下:ヨコN	ヨコM	並	526			
162	D - 13	V	精製鉢	灰黄褐	灰黄褐	ヨコM	ヨコN	並	396			
163	F - 12	V	精製鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコTN	ヨコM			細		
164	G - 14	V	精製鉢	にぶい黄褐	黄褐	ヨコM	ヨコTN	並	500			
165	F - 12	V	精製鉢	浅黄褐	淡黄褐 (皮化物付背)	ヨコTN	ヨコN		774			
166	F - 12 G - 10	V	精製鉢	褐灰 (皮化物付背)	淡黄	ヨコN	N	並	800,1024			
167	F - 12	V	精製鉢	淡黄	にぶい黄橙	タテN	TN	細	1065			
168	F - 12	V	精製鉢	にぶい橙	明褐色	N	ヨコN	並	794			
169	F - 4	V	精製鉢	灰白	灰白	N	N	細	103			
170	F - 12	I	精製鉢	にぶい黄橙	灰	底面ヨコM	N	細	769			
171	F - 12	IV	精製鉢	橙	にぶい黄橙	ヨコTN	N	並				

表5 土器觀察表(5)

図番号	出土区	遺構・層	器種	色		調		粘土・混和材	取上番号	備考
				外	内	外	内			
172	F・G 10-11	IV	精製鉢	にぶい黄橙		ヨコN		並		
173	E・12	V	鉢	橙	灰黄	ナナメN	N	並		
174	E・12	V	精製鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコN	ヨコN	細	845	
175	F・12	V	精製鉢	にぶい黄橙		ヨコN		細		
176	F・12	I	精製鉢	にぶい橙	にぶい黄橙	ヨコN	ヨコN	細	788	
177a	G・14 F・15	V	壺	淡黄橙	淡黄	ヨコ・ナナメM	上:ヨコTN 下:ヨコK	細	499,531 532,670	丹塗
177b	D・5	V	壺	淡黄	灰白	ヨコM	ヨコN	細	17	丹塗
178	G・13	V	壺	にぶい橙	明褐色	ヨコM	N	細	974	丹塗
179	G・5	V	壺	にぶい黄橙	淡黄橙	ヨコM	ヨコN	細	174	丹塗
180a	G・13	V	壺	淡黄	灰黄	ヨコM	上:ヨコN 下:ヨコK	細	912	丹塗
180b	F・11	V	壺	にぶい橙	灰白	ヨコM	上:ヨコN 下:ヨコK	細	1051	丹塗
181a	F・14	V	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコM	N	細	580	丹塗
181b	G・13	V	壺	にぶい黄橙		ヨコM		細	978	丹塗
181c	G・13	V	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	タテM	N	細		丹塗
182	G・13	V	壺	灰黄褐	灰黄褐	ヨコM	N	細	916	丹塗
183a	F・G 14・15	V	壺	淡黄	淡黄	N	N	細		丹塗
183b	G・14	V	壺	淡黄	淡黄	ナナメM	上:ヨコN 下:ヨコK	細	563	丹塗
183c	D・13-H	II	壺	にぶい橙		ヨコM	J・N	細		丹塗
184a	G・14	I	壺	にぶい黄橙	淡黄	ヨコM	ヨコ・ナナメM	細	523	丹塗
184b	E・12	V	壺	にぶい黄橙	淡黄	ヨコM	ユビオサエ	細	846	丹塗
185	G・14	V	壺	にぶい黄橙	にぶい橙	ヨコM	ヨコN	細	570	丹塗、上下連?
186	G・13	V	壺	にぶい黄橙	にぶい橙	上:ヨコN 下:ヨコK	上:ヨコN 下:JのちN	並	919	
187	F・12	V	壺	灰黄	黄灰	ナナメM	ヨコN	細	733	
188	G・14	V	壺	灰白		ナナメK		並		
189a	F・12	V	台付鉢	淡黄橙	にぶい黄橙	N	N	細		丹塗
189b	F・12	V	台付鉢	にぶい橙	にぶい黄橙	ヨコN	N	細		
190a	F・15	V	台付鉢	灰黄褐 (スス付箇)	にぶい黄橙	ヨコN	ヨコN	細	654,658 661,663 663	丹塗・黒摩
190b	E・13	V	台付鉢	にぶい黄橙 (スス付箇)	灰	ヨコN	ヨコM	細	357	
190c	G・11	V	台付鉢	淡黄橙	淡黄	ヨコN	ヨコTN	細		
190d	F・12	V	台付鉢	にぶい黄橙	淡黄橙	N	ナナメN	細		
191	D・5	V	精製鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコM	ヨコTN	細		丹塗
192	F・12	V	精製鉢	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコN	ヨコN	並		
193	F・12	IV	台付鉢	にぶい黄橙	灰黄褐	タテN	ヨコN	細		
194	F・11	V	高环	にぶい橙	にぶい橙	タテM	N	細	1055	
195	G・14	V	高环?	にぶい橙	にぶい橙	TN	N	粗	484,966 485	
196	F・12	V	高环?	黄灰	にぶい橙	ヨコN	N	並	752	
197	G・13	V	高环?	にぶい橙	淡黄橙	ヨコM	ヨコM	細	973	
198	E・5	V	?	淡黄橙	灰白	ヨコM	ヨコN	細	1110	丹塗
199a	F・11	V	鉢?	淡橙・灰黄	にぶい橙・灰黄	ヨコM	ヨコTN	並	1046	
199b	E・13	V	鉢	にぶい橙	灰黄褐	ヨコM	ナナメN	並	383	
200	F・13-G・11 F・12	V	精製鉢	淡黄~にぶい橙	淡黄	ヨコN	ヨコN	並	662,1049	
201	F・12	V	?	にぶい橙	淡黄橙	ヨコN	ヨコN	並	1061	
202a	H・6	V	甕	灰黄	灰黄	ヨコ工具M	ヨコのち タテ工具M	並	310,315	
202b	G・6	V	甕	灰黄	にぶい黄 (スス付箇)	ヨコ工具M	ヨコのち タテ工具M	並	319	
203	G・5	V	甕	灰	灰褐	タテ工具M	T	並	255	
204	G・7	V	甕	にぶい黄褐	褐	ヨコ工具M	上:ヨコ工具M 下:N	粗	988	
205	E・5	V	甕	精製	にぶい橙	ヨコN	ヨコN	粗	78	

表 6 土器觀察表(6)

番号	出土所	遺構・層	器種	色		形		質		騎士・ 混和材	取上 番号	備考
				外	内	外	内	外	内			
206	G - 5	V	壺	にぶい黄橙	にぶい黄橙	ヨコ工具M	ヨコ工具M	並	257			
207	G - 5	V	壺	黒褐(スス付着)	にぶい黄橙	ヨコ工具M	ナメ工具M	並	1244			
208	G - 13	V	壺	黒(スス付着)	にぶい赤褐	ナメ工具M	ヨコ工具M	並	938			
209	G - 13	V	壺	にぶい橙 (スス付着)	褐色(炭化物付着)	タテ工具M	ヨコTN	並	936,1172			
210	H - 5	V	壺	褐灰(スス付着)	褐灰	ヨコ工具M	N	並	287			
211	G - 5	I + V	壺	褐灰(スス付着)	にぶい黄褐	ヨコ工具M	N	並	192,262			
212	G - 4	V	壺	黄灰	浅黄	ヨコ工具M	N	粗	204			
213	H - 5	V	壺	淡黄褐 (スス付着)	浅黄褐	N	N	並	268			
214	G - 5 H - 5	V	壺	にぶい橙 (スス付着)	暗褐	ヨコ工具M	ヨコ工具M	粗	265,1143			
215	H - 6	V	壺	明褐(スス付着)	明褐	ヨコTN	タテ工具M	並	282			
216	G - 5	V	壺	にぶい黄橙	にぶい褐	ヨコ工具M	N	粗	254			
217	F - 4	V	壺	灰	暗灰黄	上:ヨコN 下:ナメ工具M	ヨコN	並	101			
218	E - 5	I	壺	暗灰黄	にぶい黄橙	上:ヨコ工具M 下:タテ工具M	ヨコN	並	82			
219	G - 4	V	壺	黒褐(スス付着)	褐褐	TN	タテ工具M	粗	171			
220	G - 10	V	壺	浅黄	浅黄	タテN	N	並	1023			
221	G - 5	V	壺	にぶい黄橙	灰黄	ヨコ工具N	N	並	1154			
222	H - 5	V	壺	にぶい橙	墨褐	タテH (生木/cm)	N	並	279	ハケメ工具 による部分		
223	E - 5	V	壺	明褐灰	褐灰	タテH (生木/cm)	N	並	60			
224	G - 5	V	壺	にぶい橙 (スス付着)	にぶい黄橙	上:ヨコ工具M 下:タテ工具M	タテ工具M	並	1263			
225a	D - 5	V	壺	にぶい褐 (スス付着)	褐	ヨコ工具M	ヨコN	粗	42	口縁火帯不明確		
225b	D - 5	V	壺	褐褐(スス付着)	褐黄褐	ヨコ工具M	ヨコ工具M	粗	30			
226	E - 9 G - 11 H - 6	V	壺	にぶい橙 (スス付着)	にぶい褐	上:ヨコ工具M 下:タテ工具M	ヨコ工具M	並	83,136,111 295,389			
227	E - 5	V	壺	褐褐(スス付着)	褐灰	ナメ工具M	ナメ工具M	粗	69			
228	D - 5	V	壺	暗褐(スス付着)	褐褐	ヨコ工具M	N	並	31			
229	G - 10	V	壺	褐褐(スス付着)	褐褐	ヨコ工具M	N	並	1161			
230	D - 5	V	壺	にぶい褐 (スス付着)	にぶい褐	ヨコ工具M	N	並				
231	G - 5	V	壺	灰(スス付着)	灰黄	ヨコ工具M	N	並	1255			
232	G - 5	V	壺	麻褐(スス付着)	麻褐	ヨコ工具M	タテ工具M	粗	1250			
233	E - 4	V	壺	黑褐	暗褐	TN	タテ工具M	並	65			
234	D - 5	V	壺	にぶい褐 (スス付着)	麻褐	タテ工具M	タテ工具M	並	21,52			
235	G - 5	V	壺	暗褐(スス付着)	褐	N	TN	並	292			
236	G - 5	V	壺	暗褐	褐灰·浅黄	工具N	N	並	184			
237	H - 6	V	壺	にぶい褐	褐褐(炭化物付着)	N	N	並	307			
238	D - 5	V	鉢	にぶい橙	にぶい黄橙	ナメのち ヨコ工具N	ヨコ工具N	並	5,8			
239	G - 7	I	壺	にぶい橙	灰黄	N	N	粗	990	全体的に岸城		
240	D - 5	V	壺	にぶい橙	褐	N	N	並	32			
241	D - 13	V	壺	橙	褐	ヨコN	N	並	417			
242	G - 4	V	壺	明褐	明褐	ヨコTN	ヨコN	並	147			
243	G - 4 H - 6	V	壺	にぶい橙	褐	ヨコM	ヨコM	並	158,175 177,238			
244	G - 13	V	壺	灰褐	にぶい黄褐	ヨコN	N	細	981			
245a	表 採	V	壺	にぶい黄褐	にぶい褐	ヨコM	TN	並				
245b	G - 14	V	壺	にぶい橙	にぶい黄褐	ヨコM	TN	並	553			
246a	D - 5	V	壺	橙	灰	N	N	並	18			
246b	G - 4	V	壺	にぶい黄褐	灰	N	N	並	150			
247	G - 5	V	壺	橙	にぶい黄褐	ヨコTN	TN	並	180			
248	F - 4	V	壺	橙	褐	ヨコN	N	並	122			
249	G - 5	V	壺	浅黄褐	浅黄褐	TN	ヨコM	並	1153	沈線・羽状文		

表7 土器観察表(7)

図番号	出土区	遺構・層	器種	色		調査内	整内	胎十 混和材	取上 番号	備考	
				外	内						
250	F - 5	V	壺	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ヨコM	N	細	117		
251	D - 15	V	壺	にぶい緑	にぶい緑	ヨコM	N	並	1069		
252	G - 5	V	壺	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ヨコTN	ヨコM	並	189		
253	F - 5	V	壺	上:にぶい緑 下:灰	淡黄	上:タテM 下:ヨコM	TN	並	109		
254	Iトレンチ	V	壺	灰褐(スス付着)	にぶい緑	ヨコN	N	並・ウンモ			
255	G - 5	IV	壺	灰褐(スス付着)	にぶい緑	ヨコTN	並	145			
256	F - 4	V	壺	黄緑	黄緑	ヨコN	ヨコN	粗		試掘 1トレンチ	
257	D - 5	V	壺	にぶい緑	にぶい緑	TN	TN	並	27		
258	H - 5	V	壺	浅黄	浅黄	ヨコN	N	並	272		
259	F - 5+7	I	壺	にぶい緑 (スス付着)	にぶい緑	Hのちナデ	Hのち工具N	並・ウンモ	98,108		
260	H - 5	V	壺	にぶい緑 (スス付着)	にぶい緑	N	N	並・ウンモ	273		
261	D - 5	V	壺	にぶい緑 (スス付着)	緑	ヨコN	N	並・ウンモ	40		
262	D - 14	V	壺	にぶい緑	にぶい緑	ヨコN	N	並・ウンモ	451		
263	F - 15	V	壺	にぶい緑	にぶい緑	ヨコN	N	並・ウンモ	649		
264	H - 5	V	壺	にぶい緑	灰褐	ヨコN	N	並・ウンモ	234		
265	D - 13	IV	壺	にぶい緑		ヨコN		並・ウンモ	330		
266	G - 5	V	壺	にぶい緑 (スス付着)	緑	ヨコN	N	並・ウンモ	224		
267	H - 6	V	壺	灰褐(スス付着)	にぶい緑	ヨコN	N	並・ウンモ	305		
268	表 探		壺	灰白(スス付着)	浅黄緑	ヨコN	N	並			
269	D - 5	IV	壺	にぶい緑	にぶい緑	ヨコN	ヨコN	並			
270	D - 14	IV	壺	にぶい緑	にぶい緑	ヨコN	ヨコN	並・ウンモ	470		
271	D-E - 13	V	壺	にぶい緑 (スス付着)	にぶい緑	N	HのちN	並	358,392		
272	G - 15	V	壺	にぶい緑	緑	ヨコTN	ヨコN	粗	614		
273	D - 5	V	壺	にぶい黄褐	にぶい緑	ヨコTN	ヨコTN	粗	51		
274	F-G - 10	IV	壺	浅黄緑	淡黄	N	N	細			
275	D - 5	IV	土師壺	黑褐(スス付着)	にぶい緑	ナナメN	上:ヨコK 下:ヨコK	並	11		
276	G - 5	IV	灰	黄灰	ロクロN	ロクロN	極細		1272		
277	F-G - 10	IV	灰	灰白	ロクロN	ロクロN	極細				
278	E - 4	IV	にぶい黄緑	にぶい黄緑	ロクロTN	ロクロTN	細	1111			
279	G - 5	IV	土師壺	浅黄緑	ロクロN	ロクロN	細	260	底盤み切り 板状上蓋		
280	E - 5	IV	土師壺	浅黄緑	ロクロN	ロクロN	細				
281	E - 5	IV	土師壺	にぶい黄緑	ロクロTN	ロクロTN	細				
282	G - 5	IV	土師壺	浅黄緑	ロクロN	ロクロN	細				
283	E - 5	IV	土師壺	浅黄緑	ロクロN	ロクロN	細				
284	F - 5	IV	土師壺	にぶい黄緑	ヨコM	ヨコM	細				
285	D - 5	IV	土師壺	浅黄	ロクロN	ロクロN	細				
286	D - 5	IV	土師壺	にぶい黄緑	浅黄	ロクロN	ロクロN	細	1096	底盤へラ切り	
287	E - 5	I	灰白	淡白・淡緑	ロクロN	ロクロN	細			底盤み切り	
288	D - 5	I	小豆	淡黄	ロクロN	ロクロN	細	44		底盤み切り 板状压痕	

第4章 植物珪酸体分析

イネ科栽培植物の検討を目的として、調査最終段階の平成4年3月11日に、宮崎大学農学部農作業管理学研究室の藤原宏志教授に依頼し、土層の遺存状態が比較的良好な調査区南側の2地点（A・B地点）を選んで土壤採取を実施した。その後、採取した土壤の植物珪酸体分析結果については藤原教授から以下のデータが報告され、次のようなコメントもなされた。

藤原教授による分析結果に関するコメント

1. A・B両地点とも1層～V層でイネが検出された。V層ではV層でもイネが検出されている。V層は縄文時代晩期遺物の包含層であり、検出されたイネの量からみて、これらの地点でイネが生産されていた可能性が高いと判断される。
2. 両地点ともヨシは検出されず、タケおよびススキが多量に検出された。このことは、当該遺跡が比較的乾燥した環境下で堆積したこと示している。また、Va層、Vb層は自然地形に対応した、緩やかな傾斜面である。これらの状況を勘案すると、ここでの稻作は水田作ではなく、畑作系譜の稻作を想定するのが自然であろう。
3. 両地点ともVI層（御池軽石）を除く各層からキビ族植物が多量に検出される。同族にはアワ、ヒエをはじめ多くの雑穀類が含まれており、それらの畑作物が、イネとともに、ここで生産された可能性のあることを示している。

表8 A地点プラント・オパール定量分析結果

sampling block [A]
sampling date (3/11/92)

植物体乾重 (t/10a.cm)

属名	イネ (O.sati.)	イネ粉 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
I	2.666	0.934	7.375	3.349	0.000	1.668	0.750
III	1.287	0.451	13.351	6.062	0.000	5.043	1.900
IV	0.502	0.176	12.511	5.681	0.000	3.938	2.967
Va-1	1.077	0.377	15.640	7.102	0.000	3.077	7.267
Va-2	0.000	0.000	14.367	6.524	0.000	1.484	4.563
Vb-1	0.552	0.193	11.443	5.196	0.000	1.216	1.279
Vb-2	0.526	0.184	2.184	0.992	0.000	0.773	0.888
VI-1	0.000	0.000	1.558	0.708	0.000	0.307	0.792
VI-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
VII	0.000	0.000	9.379	4.259	0.000	1.637	0.834

表9 B地点プラント・オパール定量分析結果

sampling block [A]
sampling date (3/11/92)

植物体乾重 (t/10a.cm)

属名	イネ (O.sati.)	イネ粉 (rice g.)	キビ族 (Pani.)	キビ族種実 (Pani.seed)	ヨシ (Phrag.)	タケ亜科 (Bamb.)	ウシクサ族 (Andoro.)
I	0.520	0.182	19.436	8.826	0.000	3.909	3.073
III	0.429	0.150	5.334	2.422	0.000	0.979	0.904
IV	0.891	0.312	53.622	24.350	0.000	3.201	3.759
Va	1.264	0.443	19.669	8.932	0.000	1.548	1.466
Vb	0.000	0.000	8.990	4.082	0.000	1.859	2.010
VI-1	0.000	0.000	1.609	0.731	0.000	0.317	0.327
VI-2	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.118	0.153

図31 A地点プラント・オバル定量分析結果

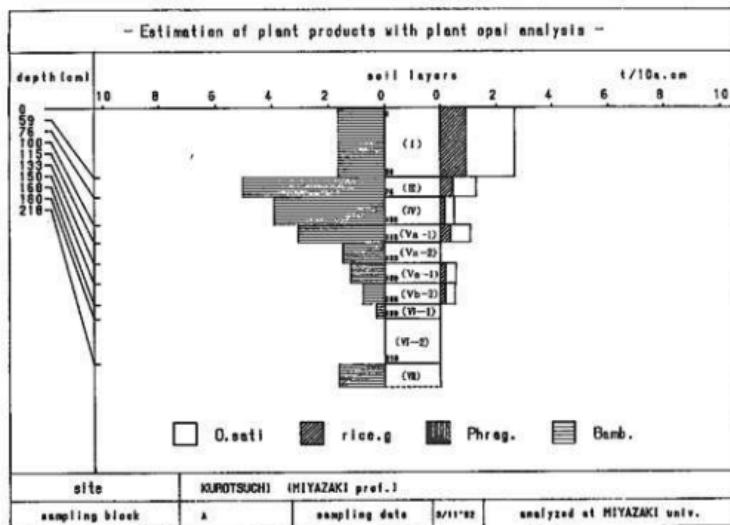
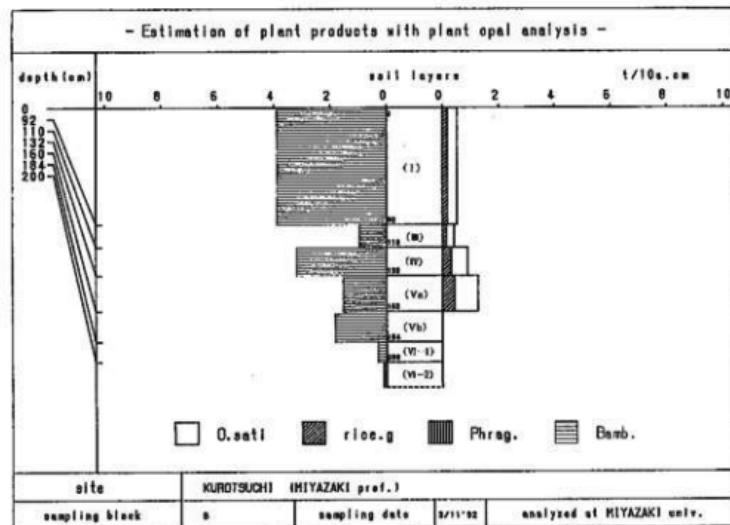


図32 B地点プラント・オバル定量分析結果



第5章 総括

1. V層出土遺物の位置付け

今回の調査は道路建設予定地の狭い範囲に限定されたため遺構群を面的にとらえることはできなかったが、包含層、特にV層の縄文時代晚期～弥生時代前期の遺物の発見はこれまで資料不足により不明瞭であった東南部九州地域の当該期の様相を明らかにするための手がかりとなりうるものであった。ここではそういう質・量において卓越したV層出土遺物を中心に検討を加えたい。

1) 土器

第3章においてV層出土土器を5群に分類した。その中で、第1群と第2群を縄文時代に、第4群と第5群を弥生時代にそれぞれおおまかな位置付を示し、第3群についてはあえてその時期を示さなかった。そこで以下、各群について再度より踏みこんで検討してみよう。

第1群土器は深鉢の器面調整に研磨が認められる点や外縁にみられる凹線文から縄文時代後期後葉の三万田式土器に並行するものと考えられ、鹿児島県末吉町中岳洞穴出土土器を標準とする中岳式土器⁹に相当する。

第2群土器は深鉢の口縁部肥厚や浅鉢の形態から縄文時代晚期前半に位置付けられ、宮崎市松添貝塚出土土器を標準とする松添式土器¹⁰に該当する。

第3群土器はいわゆる突帯文土器様式（あるいは凸帯文系上器様式¹¹）に該当する。同様式の中の壺については近年の各地域の編年研究の進展によって細かい変遷がとらえられ、縄文時代後期後半から弥生時代前期にかけてかなり長期間存続していることが明かとなりつつある¹²が、本遺跡の土器群はそのような時代の過渡期にどう位置付けられるのであろうか。

まず、第3群土器の特徴を以下にまとめてみよう。

甕はおおむね二条突帯で、突器刻目は指頭刻み手法が60%を占め、全体的に粗い刻みが主であり、一部に77～82のような細めの工具刻みが認められるが、この差異は時期差を示すものではないと考えている。器面調整はナデが主体的である。鉢には精製と粗製があり、精製鉢は口縁部と胴部に突帯の貼り付けられたものがあり、浅鉢は外縁の口縁・肩部に沈線をもつものと反転した口縁端部に突帯をもつものがある。これらの精製器種には丹塗りされたものがある。また、ここでは粗製に含めたが、刻目突帯をもつ半精製半粗製の組織痕土器が伴っている。壺は丹塗り研磨されたものとそうでないものとがあるが、前者が圧倒的に多く、法量には大小が認められる。また、肩部や口縁部に突帯を貼り付ける特徴的な手法が存在する。高环は波状口縁で、上面観が方形を呈し、口唇部が沈線や貼り付け文で飾られる他、外縁にも沈線が施され、丹塗りされたものがある。これらは先述したように、刻目突帯文甕を中心として出土分布等からセットとなる器種を抽出したものであり、器種ごとの胎土や器面調整などからほぼ同一時期の所産と考えているが、今後、他の遺跡において良好な一括資料が発見されれば細分される可能性もある。

次に、類似資料を周辺遺跡に求めてみる。壺の突帯刻目に指頭刻みが多いという傾向は宮崎県えびの市桑田遺跡¹³や鹿児島県末吉町上中段遺跡¹⁴で認められる。また、肩部に突帯をもつ壺（177,

178,179,186) の類例は鹿児島県末吉町楠木岡遺跡⁴⁸・上中段遺跡・鹿屋市板木原遺跡⁴⁹で発見されている。さらに、高坏(189,190)など特殊な器種の口縁部に貼り付け文や沈線文の施された例は前掲の楠木岡遺跡でもみられる。つまりここにあげた宮崎県西南部および鹿児島県の大隅半島北部の遺跡から出土した土器とはかなり類似しているといえる。

これに対し、宮崎市平畠遺跡SA54⁵⁰や東郷町下水流遺跡⁵¹では当遺跡において見出だせない肩部突帯を欠く貝殻条痕の甕が出土している。また、都城市に隣接する高城町城ヶ尾遺跡⁵²ではすべての甕の口縁部突帯は口縁端部より下がるもので、口縁部にヒレ状突起をもち、口縁部突帯下に孔列文のある刻目突帯文土器も含まれている。平畠遺跡や下水流遺跡出土の甕は夜臼I式に並行とされる大分県の下黒野式に類似すると指摘されている⁵³が、これらの遺跡の甕は当遺跡のそれと様相が異なるし、甕も検出されていない。

さて、甕の口縁部突帯の貼り付け位置と形の違いが編年に有効であるという見方があるが、福岡市板付遺跡の出土資料について検討した山崎純男は古段階(夜臼I式)では突帯が口縁端より下がるもの約7割を占めるのに対し、板付I式と共に伴する新段階(夜臼IIb式)では約3~1割に減少するという傾向を指摘している⁵⁴。当遺跡の甕の口縁部突帯を確認できたもの30点中、口縁端部より下がるものは8点(26.6%)で、口縁端に接するものは22点(73.4%)であった。この比率をみると限り、福岡平野部における比較的新しい様相をもつ突帯文土器(山崎の夜臼IIb式)に比定される。しかし一方で福岡平野部の同段階には突帯が口縁端におおいかぶさるカマボコ形断面のものが10%以上の割合を占めるのに対し、当遺跡ではそのようなタイプは一点も認められず、一概に新しく位置付けられないようである。

田中良之は突帯文土器様式(夜臼式)の変遷過程について、「薬畑遺跡をはじめとする層位的調査例や一括資料をみると、1条刻目突帯紋甕の比率が大から小へ、口縁端を強調した浅鉢から単純な反転口縁浅鉢へ、それに伴って高坏(台付浅鉢)が増加し丹塗りの浅鉢が減少して浅鉢の粗製化も進行する、甕の口縁部突帯が口縁端から下がった位置につくタイプ主体から口縁端につくタイプ主体への移行、無突帯無紋の伝統的粗製深鉢(甕)の比率がだいに小さくなる、などの古・新の傾向は指摘される。」と述べつつ、「これらはあくまでも漸移的に連続する傾向であり、属性の存否によって区切られることはない」とことと各属性ごとに地域差も考慮すべきことなどを注意点としてあげている⁵⁵。このように、突帯文土器様式の編年について総合的な観点が必要とされよう。

本土器群は、浅鉢の外面に沈(凹)線をもつものが含まれることや、晚期後半から受け継がれた組織痕土器を確実に伴うこと、波状口縁の装飾高坏が含まれるなど古い様相が看取されることから、とりあえず繩文時代晩期末・「突帯文土器単純期」の所産としておくが、板付I式甕(如意形口縁甕)を見出せない本遺跡において、その点に関しての詳細な言及は不可能である。ちなみに、先述した下黒野式並行期の平畠遺跡・下水流遺跡出土土器や古相を示す甕を含む城ヶ尾遺跡出土土器に先行する可能性は少ないものと考える。

また、口縁部に突帯をもつ浅鉢、肩部に突帯をもつ壺の存在、沈線文・貼り付け文で飾られた高坏などは大淀川上流域の地域色としてとらえられる。一方で、甕の突帯刺突刻み(指頭刻み)の卓越や器面調整技法は、藤尾慎一郎が上中段遺跡出土土器等について指摘した⁵⁶ように西部九州と共に

通しており、組織痕土器の存在も有明海沿岸部の組成と似通っている。

器種組成についてみると、総数162点のうち、甕72点（44.4%）、壺12点（7.4%）、精製鉢29点（18%、うち浅鉢22点・14%）、粗製鉢36点（22.2%、うち組織痕30点・19%）、高壺7点（4.3%）、その他6点（3.7%）となっている。煮沸容器である甕の割合が半数以下となっているが、約2割を占める粗製鉢（組織痕土器）にはススや炭化物が付着しており、煮沸用途が想定され、このような晩期前半以来の器種が甕の割合にいくこんでいるためと思われる。壺の割合についてみると、板付遺跡G-7a・7b 調査区下層（夜臼I式期）の約40%⁹をはるかに下まわるものの、佐賀県唐津市菜畠遺跡12・13層（山ノ寺式期）の約10%¹⁰に見劣りするものではない。一方で、浅鉢は15%以下であり、かなり低くおさえられている。

第4群土器は特徴的な粗いミガキ調整の施された突帯文甕を中心とした土器群である。第3章では大枠で弥生時代前期ととらえたが、これらの土器群にはある程度の時間幅が認められそうである。以下詳細にみてみよう。

甕についてみると、同じような土器群が当遺跡とは川を挟んで対岸にある大岩田村ノ前遺跡において遺構SC2と包含層から出土している。筆者は同報文中において、突带上に刻みのあるものなどないものが同一遺構内から出土したことと胎上・色調・調整技法が共通することなどからほぼ同一時期のセットととらえ、共伴するとみなした「亀の甲タイプ」甕（図33の3）から弥生前期後半という位置付けを示した¹¹。また、粗いミガキによる甕の器面調整技法を都城盆地の地域色と考えた。一方、東和幸は大隅半島の鹿児島県根占町貢見原遺跡¹²出土上器を検討し、5トレンチの9層（下層）から如意形口縁の甕（板付系）、刻目突帯文甕、頸部と胴部の境に殷・沈線文をもつ甕が出土し、8層（上層）から刻目突帯文甕と無刻目突帯文甕が出土したことから、無刻目突帯文甕を後出すると考え、下層土器を前期の古段階に、上層土器を前期の新段階に位置付けている¹³。さらに、無刻目突帯文甕には口縁部と胴部の突帯をつなぐ縦位の突帯が施されるという特徴も指摘している。ちなみに、同遺跡で出土した甕は如意形口縁のものを除くとすべて上記のミガキ調整が施されており、大岩田村ノ前遺跡や当遺跡のものと共通している。したがってこのような調整技法は都城盆地だけでなく、さらに南の大隅半島においても採用されていた可能性がある。

当遺跡の202・208などは器面調整を除外して考えると第3群土器の77~82からの系譜を引くものと思われ、前掲の貢見原遺跡の9層出土の刻目突帯文甕に類似しており、前期古段階に位置付けられる。一方、214は口縁部突帯が口縁端に覆いかぶさるように貼り付けられ、胴部突帯はそれよりやや小さく、刻目も細かい。このような特徴は前掲の大岩田村ノ前遺跡出土の「亀の甲タイプ」に類似し、前期後半に位置付けられよう。また、224~233の無刻目突帯文甕は前掲の貢見原遺跡の8層出土土器に類似しており、東の編年観に従えば、前期の新段階に相当する。また、口縁端より下がる位置に凸帯をもつ甕（203~205）の存在は大分県における板付II式並行期の下城式土器の甕に通じるものがある。さらに、おそらく宮崎平野部以北（高鍋町水谷原遺跡¹⁴に類似がある）からの移入土器と思われる繊細な刻目を口唇端部にもつ236もこの段階に属するものであろう。

なお、器面調整にハケメをみる土器（217,221~223）が少量見出されている。当地域においてハケメ技法が確実に定着するのは宮崎県高崎町今村遺跡出土土器¹⁵の段階であり、おおむね中期

初頭と考えているが、当遺跡のものについては口縁部突帯の形状を考慮して前期末に位置付けておく。

壺は断片的ながら十数点の破片資料が出土している。単純口縁のもの、口縁部が肥厚するもの、沈線文をもつものの、頸部と胴部の境に突帯をもつものなどがあるが、確実に前期の古段階といえるものではなく、全体的に前期新段階の色合いが濃い。なお、243を除いた肩部に沈線をもつタイプは全体像が不明であるため中期初頭に下がる可能性も否定できない。

さて、竪穴住居跡の覆土中において肩部に刻目突帯をもつもの(3)がナデ調整の口縁部二条突帯壺(1)と共に伴しているが、同タイプの壺は先述した特徴的な器面調整技法の壺とはセットをなすものではないと思われる。とりあえずこのような竪穴住居出土土器を指標として前期末に位置付けておく。そうなると、粗いミガキ調整の施された壺とセットになる壺は胎土・色調等から243などの限られたものとなる。

第5群土器は弥生時代中期に比定した土器群である。

254～257の壺は前掲の今村遺跡出土土器に類似している。254は口縁突帯に比べ口縁下突帯は極端に小さくなり、胎土にはキンウンモの混入が認められる。こういった特徴は竪穴住居出土の壺に比べ新しいと考えられ、中期初頭に位置付けられる。

他方、269を除いた259～271は口縁部突帯の先端を強くヨコナデすることによって「M」字状の断面形態をつくりだす壺で、脇部に丁寧にヨコナデされた断面三角形の突帯がめぐらされる。261のように口縁部突帯が垂れ下がり気味のものや270のように若干立ち上がったものもある。壺の多くは胎土にキンウンモを含んでおり、当地域から大隅半島にかけての共通点となっている。セットとなる壺は272～274のように頸部から口縁部にかけて極端に外反し、その先端は強くヨコナデされ、凹線状にくぼんでいる。口縁部を欠くものの、土坑内から出土した4はこの段階の壺であり、肩部の突帯文の下に縦方向の直線的な櫛描文が施されている。以上は中期中葉に位置付けられる。

2) 石 器

石器は北区の遺構内から出土した石鎚(6・7)を除くと、土掘り具1点、石庖丁1点、穿孔貝1点の合計3点の石器が検出された。所属時期については、第3章で述べたように分布状況から第3群土器に伴うものであると推定した。

土掘り具(275)は「しゃもじ」状の特殊な形態を呈する。刃部は使用により著しく摩耗し、やや斜め方向の線条痕が観察される。鹿児島県内の石製土掘り具を検討した東和幸は、このような刃部と柄部を明確に区別したタイプをII B類とし、同県大隅町鳴神遺跡の例から夜臼式土器段階に伴うものではないかと考えている²⁶⁾。さらにその機能については民具との比較から、穴を掘ることと土をあげることを主な目的とした「キンツ」のような道具を想定しているが、当資料刃部の使用痕からは垂直に地面を掘るものとは考えられず、むしろ手鋤などの用途が推定されよう。

石庖丁(276)は回転ではなく、擦り切りによって穿孔したその技法に特徴がある。このような穿孔技法の石庖丁は管見では九州内において11か所の遺跡で合計13点が確認されており(表9)、宮崎県内では3遺跡が知られている。さて、下條信行はこのような技法の石庖丁が中国の黄河沿いにみられ、朝鮮半島でも発見例があると述べ、特に、日本国内の初期石庖丁と朝鮮半島の例につい

ては製作技術上密接な関係にあることを指摘し、「日本の初期福作に伴う石廻丁は中国長江下流域に求めるることは困難で、朝鮮半島の南岸部付近にその直接の系譜があったものとすることができ」と結論づけている²⁶。朝鮮半島南部の石廻丁の基本形態は直背外湾刃、片刃まれに偏平両刃、厚身をなし、ことさらに大形でないとされており、先に示した九州内の例もおおむね直背外湾刃の半月形を基本形態とする。ところが、本遺跡のものは横長剥片を加工した外湾背外湾刃の不整梢円形を呈し、基本形態から逸脱している。ちなみに利用石材は当地域で調達できる頁岩系ホルンフェルスで、ともに出土した土掘り具と同じであるという点が興味深い。九州内における伝播段階に変容した可能性が考えられる。

表10 摘り切り技法石廻丁出土遺跡

遺跡名	所在地	点数	時期	出土状況	備考	註
菜畑遺跡	佐賀県唐津市	2	縄文晩期	包含層		(20)
宇木汲田遺跡	佐賀県唐津市	2	縄文晩期	包含層		(31)
西原遺跡	佐賀県佐賀市	1		包含層		(32)
鶴町遺跡	福岡県福岡市	1	弥生前期	包含層	擦切溝と円孔の併存	(33)
大板井遺跡	福岡県小郡市	1	弥生中期?	土塁2号出土	擦切溝と円孔の併存	(34)
砂山遺跡	福岡県中間市	1		採集		(35)
原山遺跡	長崎県北有馬町	1		採集		(36)
玉里	鹿児島県鹿児島市	1	弥生前期?	採集	擦切溝と円孔の併存	(37)
古川町	宮崎県延岡市	1		採集		(38)
峰ノ前	宮崎県西郷村	1		採集		(39)
前原北遺跡	宮崎県宮崎市	1		土塁8号出土		(40)
黒土遺跡	宮崎県都城市	1	縄文晩期	包含層		本報告書

穿孔具(277)は紡錘形でなく、偏平で、先端部側縁だけに使用痕がみられるもので、砥石の転用品とも考えられる。類例は福岡県二丈町曲り田遺跡²⁷や佐賀県唐津市菜畑遺跡²⁸で出土している。磨製穿孔具を集成し、検討を加えた中間研志は1類とした先端が段をなし細くなる小型類の定型化したものは時期が「弥生早期～前期初頭」に限定されるとし、大陸系磨製石器群導入に伴って出現したとしている²⁹。

ちなみに、宮崎県内では宮崎市保木下遺跡で紡錘形のものが1点確認されている³⁰。

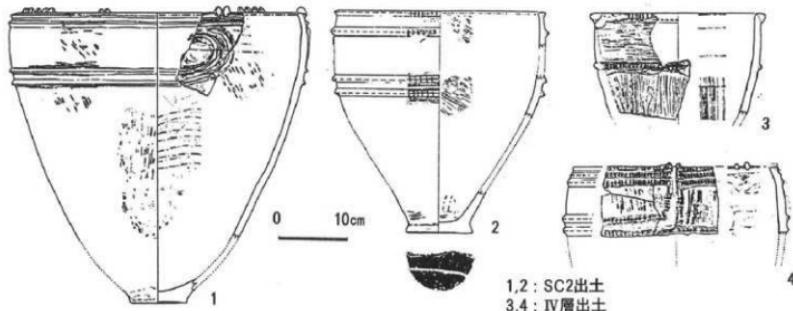


図3-3 大岩田村ノ前遺跡出土の弥生時代前期壺

(重永卓爾編1991 大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書より転載)

2. まとめ

当該地は約4000年前の御池降下軽石の堆積後、縄文時代後期後葉に生活が営まれはじめ、縄文晩期を経て弥生時代中期中葉まで、断続的に利用されたようである。

遺物の量が最も多かったのは縄文時代晩期末・突帯文土器期で、南区V層を中心に出土した遺物からは西北部九州の影響を受けつつ在地化した稻作文化が営まれたことをうかがうことができた。土器についてみると丹塗磨研壺を含む器種構成をはじめ突帯文壺の器形・施文・調整技法には西部九州の影響が看取されるものの、突帯をもつ壺・口縁突帯をもつ浅鉢・刻目突帯文の組織痕土器・沈線文や貼り付け文で飾られた高环等々は他地域に類例をみない地域色ととらえてよいものであった。また、大陸系磨製石器である擦り切り孔をもつ石庖丁や磨製穿孔具は北部九州における水稻耕作開始期のものと時期差はないものと思われるが、石庖丁の形態は変容しているし、調査面積の制約もあってか大陸系磨製石器のすべての器種が出そろってはいない。

さて、晩期末の土器片には、糊痕をもつものや胎土中に米粒が混入したものなどが認められ、土壤のプラントオパール分析結果によっても、軽石層以外のすべての土層からイネ・キビ族植物が検出されており、当該期（V層堆積時）に稻作が行われたことは確実である。遺跡周辺の低湿地の調査が行われていないため水稻耕作の有無を確認できないが、石庖丁と石製土掘り具の組合せは傾斜地でかつ乾燥した条件下の当該地においてイネとアワ・ヒエなどの雑穀類が畑作によって栽培されていたことを反映しているのかもしれない⁽⁴⁰⁾。今後の周辺調査に期待したい。

弥生時代の遺物は北区V層を中心に出土した。中でも前期の特徴的な器面調整技法を伴う壺の出土は注目される。遺構は前期末の堅穴住居1基、中期中葉の土坑1基が検出された。

その後、しばらく間があき、平安時代に再び生活の痕跡が残され、集落の区画のためと思われる溝状遺構や道路状遺構を伴う中世へと続き、桜島文明軽石が降下した頃にはそれも廃絶したようである。

註

- (1) 成尾英仁 1985 「曾於北部における火山灰層序と土壤組成について」『高方入口遺跡ほか』
末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(3) 末吉町教育委員会
- (2) 古原地研究所の杉山真二氏の教示による推定年代。
- (3) 河口貢徳編 1980 「中岳洞穴」 末吉町教育委員会
- (4) 山崎純男・鳥井義昭 1981 「九州の土器」『國文化の研究4 純文土器II』 雄山閣
- (5) 泉 拓良・山崎純男 1989 「凸帶文系土器様式」『純文土器大綱4 後期・乾期・純概文』 小学館
- (6) 藤尾慎一郎 1991 「水稲耕作開始期の地域性」『考古学研究第38巻第2号』 考古学研究会
- (7) 中野和善 1991 「宮崎県えびの市桑田遺跡」『日本考古学年報43』 日本考古学協会
- (8) 鹿児島県末吉町教育委員会 1986 「上中所遺跡はか」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- (9) 鹿児島県末吉町教育委員会 1987 「猪木遺跡はか」 末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
- (10) 鹿児島県教育委員会 1987 「櫻木原遺跡」 鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書(4)
- (11) 宮崎県教育委員会 1985 「平畠遺跡ほか」 宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集
- (12) 宮崎県東郷町教育委員会 1987 「赤松遺跡・下水波遺跡」 東郷町文化財調査報告書第1集
- (13) 宮崎県高城町教育委員会 1989 「城ヶ尾遺跡」 高城町文化財調査報告書第1集
- (14) 石川悦雄 1986 「宮崎県における弥生文化の成立と大陸文化」『月刊考古学ジャーナルNo264』 ニューサイエンス社
- (15) 山崎純男 1980 「弥生文化成立期における土器の編年的研究」『龍山猛先生古稀記念古文化論叢』
- 龍山猛先生古稀記念論文集刊行会
- (16) 田中良之 1986 「純文土器と弥生土器 西日本」『弥生文化の研究3 弥生土器I』 雄山閣
- (17) 藤尾慎一郎 1993 「南九州の突帯文土器」『鹿児島考古第27号』 鹿児島県考古学会
- (18) 前掲9
- (19) 中島直幸 1982 「菜畑」 唐津市
- (20) 桑畠光博 1991 「包含層出土の弥生土器について」『大岩田村ノ前遺跡発掘調査報告書』 都城市文化財調査報告書第14集 都城市教育委員会
- (21) 鹿児島県根占町教育委員会 1989 「見貫原遺跡」 根占町埋蔵文化財発掘調査報告書(1)
- (22) 東 和季 1993 「鹿児島県弥生時代前期土器研究の現状」『鹿児島考古第27号』 鹿児島県考古学会
- (23) 宮崎県教育委員会 1988 「水谷原遺跡」
- (24) 宮崎県教育委員会 1979 「今村遺跡」『九州総質自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書(3)』
- (25) 東 和季 1993 「石製土器具について」『鹿児島民具第11号』 鹿児島民具学会
- (26) 下條信行 1980 「東アジアにおける外湾河石遺跡の展開」『龍山猛先生古稀記念古文化論叢』
- 龍山猛先生古稀記念論文集刊行会
- (27) 福岡県教育委員会 1984 「石崎曲り田遺跡II 中巻」 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第9集
- (28) 前掲9
- (29) 中間研志 1985 「夢製作穿孔具集成」『石崎曲り田遺跡III』 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第11集 福岡県教育委員会
- (30) 宮崎県教育委員会 1986 「保木下遺跡」
- (31) 下條信行 1986 「日本縫作受容期の大陸系磨製石器の展開」『九州文化史研究所紀要第31号』
- (32) 佐賀県教育委員会 1983 「西原遺跡」『佐賀県文化財調査報告書第86集』
- (33) 福岡市教育委員会 1976 「鶴町遺跡」 福岡市埋蔵文化財調査報告書第37集
- (34) 福岡県教育委員会 1988 「大坂井遺跡 上巻」 九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書(4)
- (35) 中村修身 1987 「砂山遺跡出土・擦切溝状穴石廻丁」『地域相研究第17号』
- (36) 横口達也 1985 「日本における縫作の開始と発展」『石崎曲り田遺跡III』 今宿バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第11集 福岡県教育委員会
- (37) 麻生孝行 1982 「有溝の石廻丁」『鹿児島県考古学会紀要2』
- (38) 下條信行 1977 「九州における大陸系磨製石器の生成と展開」『史蹟144』
- (39) 前掲9
- (40) 宮崎県教育委員会 1988 「前原北遺跡はか」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第4集
- (41) 藤原宏志はえびの市桑田遺跡の夜白式土器を包含する土層から検出されたイネのアラント・オバールが形状解析の結果、熱帯島南部に分布する畑作系のイネに類似していると報告し、「日本における縫作の起源やその伝播ルートを考える場合、その栽培様式を水田栽培に擬定せず、畑作系縫作の栽培についても、その研究方法を含めて検討しなければならない時期にきている」と指摘している(藤原宏志 1991 「日本における縫作の起源と伝播に關わる一、二の考察——最近のアラント・オバール分析結果から——」『月刊考古学ジャーナルNo337』)。

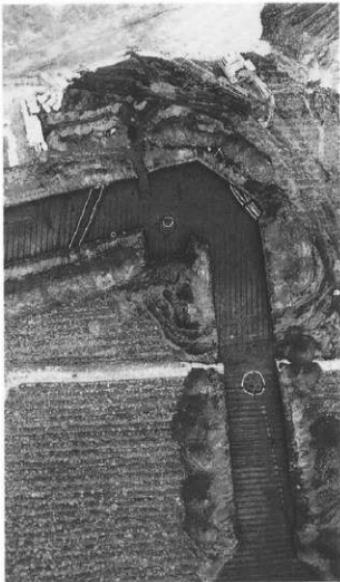
フリガナ	クロツチ イセキ					
書名	黒土遺跡					
副書名						
卷次						
シリーズ名	都城市文化財調査報告書					
シリーズ番号	第28集					
編集者名	桑畠 光博					
発行機関	都城市教育委員会					
所在地	宮崎県都城市姫城町6街区21号					
発行年月日	1994年3月31日					
フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
クロツチイセキ 黒土遺跡	ミヤコノジョウ 都城市 タコノジョウ 大岩田町字黒土	31° 41' 51"	131° 03' 21"	1992.02.10 ~ 1992.03.13	1,618	民間分譲 住宅造成
種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項
集落跡	縄文 (後~晚期)			土器(突器文甕や丹塗磨研壺など) 石器(擦り切り石廻丁・穿孔具)		縄文時代晩期 末の稲作開始期の土器・大陸系磨製石器のセットが得られた。
	弥生(前・中期)	竪穴住居跡1・土坑1		土器・磨製石器		
	平安			須恵器・土師器		
	中世	道路状遺構3・ピット1 溝状遺構2		土師器・磁器		



△遺跡遠景（北側上空から）

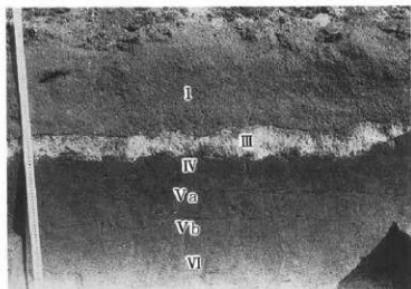


△調査区全景（真上から）



△北区遺構群（真上から）

図版 2



△G-13区土層断面（西から）



△A地点土壤採取風景



△堅穴住居跡覆土断面



△堅穴住居跡覆土内遺物出土状況



△堅穴住居跡完掘状況

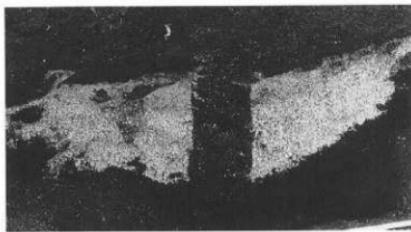


△土坑完掘状況

図版 3



1号溝
同上断面



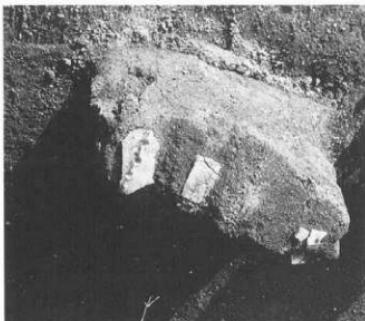
3号道路状遺構▷



図版 4



△G-14・15区（V層）遺物出土状況



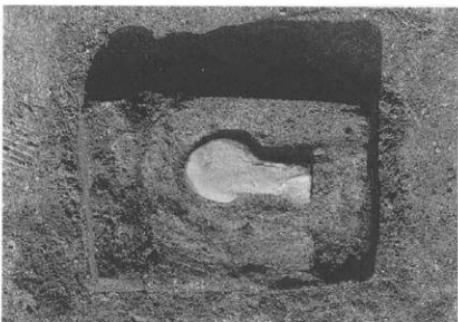
△F-12区（V層）突帯文甕出土状況



△G-13区（V層）丹塗磨研壺出土状況



△F-12区（V層）石庖丁出土状況

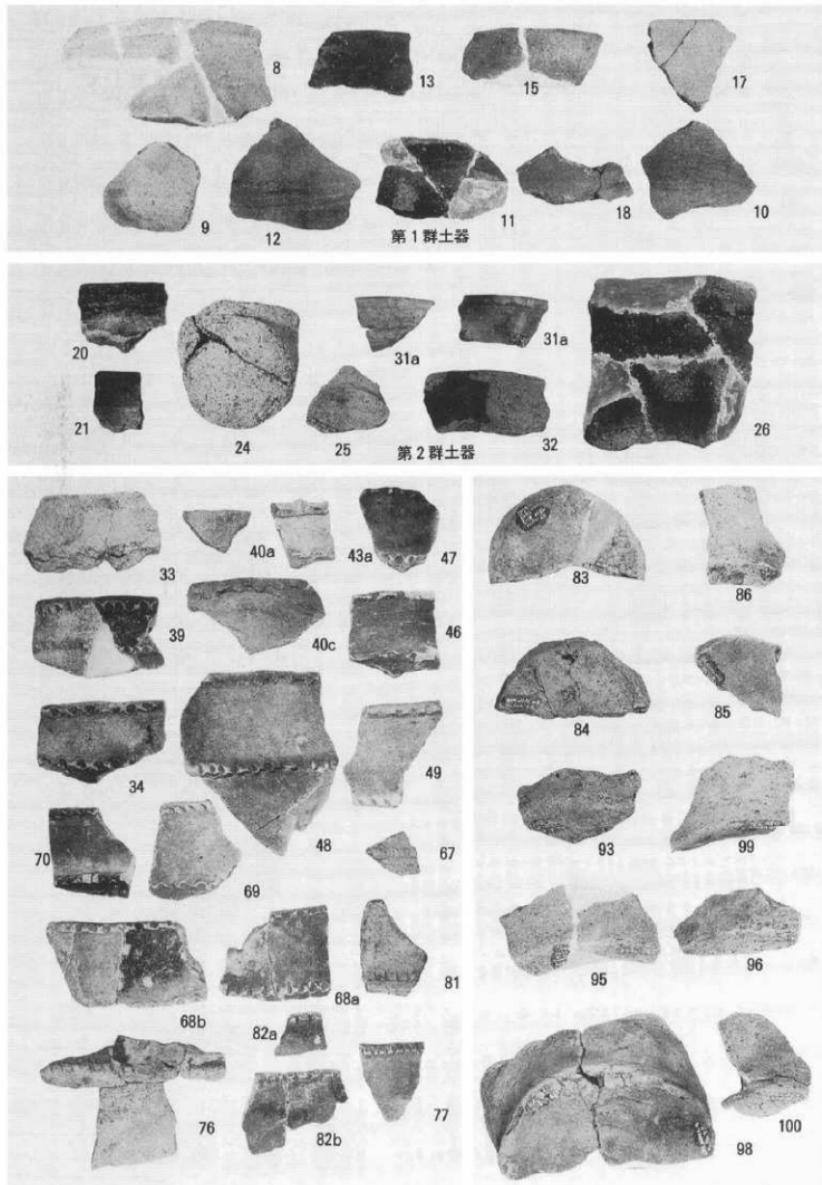


△G-14区（V層）石製土掘り具出土状況



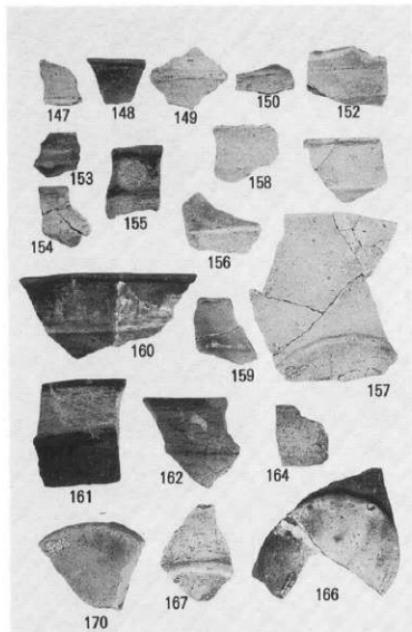
△F-12区（V層）磨製穿孔具出土状況

図版 5

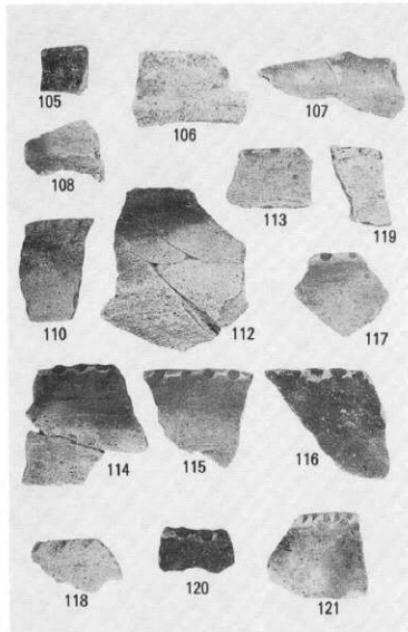


第3群土器（壺とその底部）

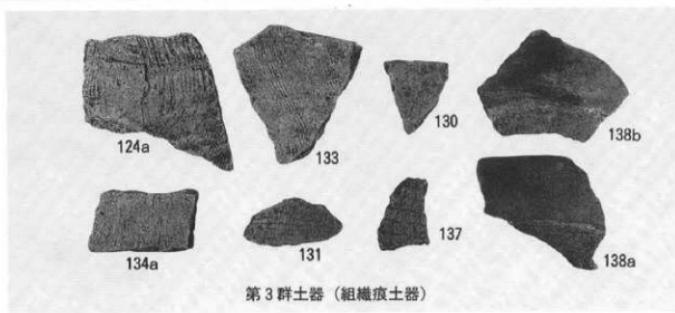
図版 6



第3群土器（精製鉢）



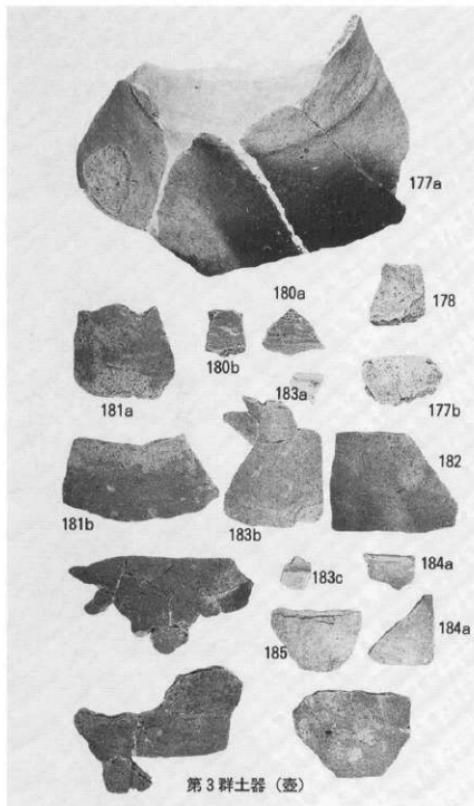
第3群土器（粗製鉢）



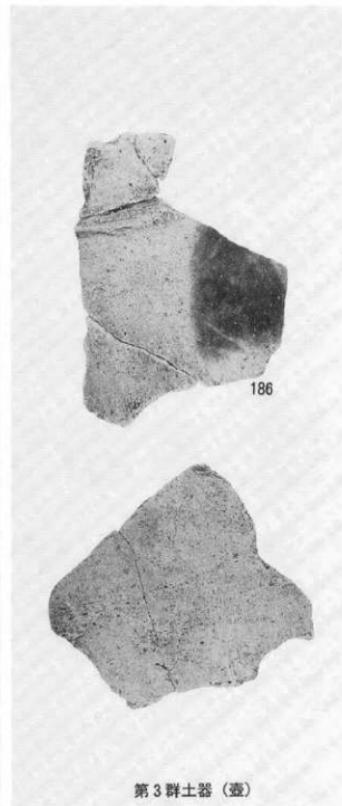
第3群土器（組織痕土器）



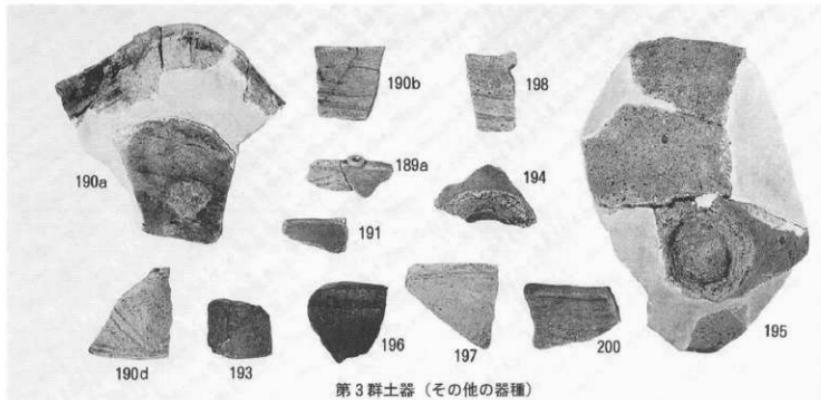
木葉圧痕土器



第3群土器（壹）

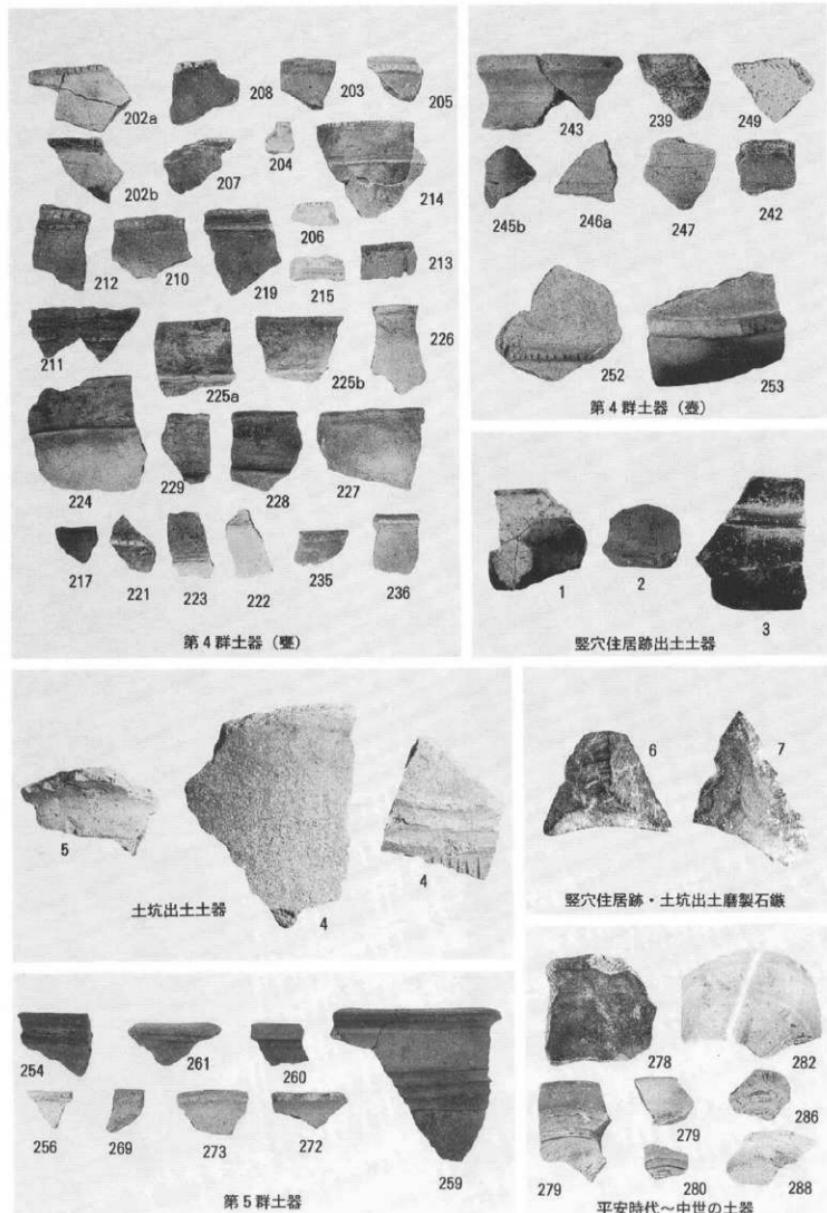


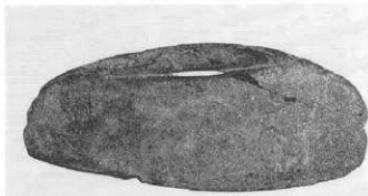
第3群土器（壹）



第3群土器（その他の器種）

図版8

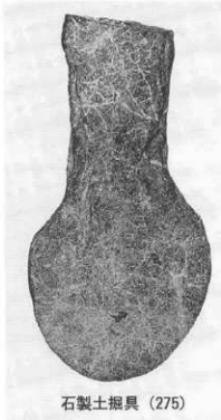




石庖丁 (276)



磨製穿孔具 (277)



石製土掘具 (275)



粗痕土器 (33)



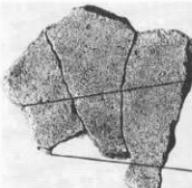
粗痕土器 (98)



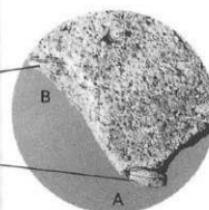
粗痕土器 (175)



粗痕土器 (174)



粗痕土器 (176)



B

A



粗痕顯微鏡写真 (175) 約10倍



米頭顯微鏡写真 (176A) 約10倍



米頭顯微鏡写真 (174) 約9.3倍



米頭顯微鏡写真 (176B) 約10倍

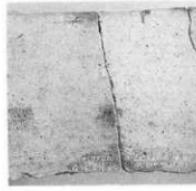
図版10



工具ナデ (48・外面)



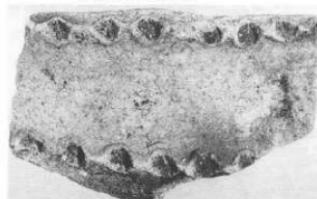
工具ナデ (68b・外面)



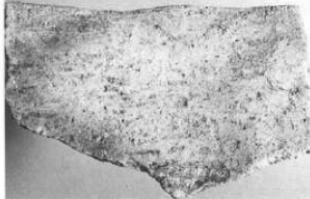
丁寧な工具ナデ (68b・内面)



工具ナデ (70・外面)



ナデ (34・外面)



ケズリ (34・内面)



粗いナデ (70・内面)



ナデ (46・外面)



条痕のち丁寧なナデ (46・内面)



ケズリ (114・外面)



丁寧なナデ・ミガキ (114・内面)



粗いミガки (227・外面)



粗いミガキ (227・内面)



ハケメ (222・外面)



粗いミガキ (224・外面)



粗いミガキ (224・内面)



縞布压痕 (124a)



平織+網目压痕 (137)



平織压痕 (138b)

器面調整と組織痕

あ　と　が　き

都城市は平成元年、全国でただ一か所だけ市街化調整区域、いわゆる線引きの撤廃を断行した。

その結果、市内では民間の分譲住宅など小規模な開発が続出することになった。

当遺跡の発掘調査もそういった民間開発に伴うもののひとつである。

試掘・埋蔵文化財の取扱いに関する協議を経て、本調査に至るまで、多くの困難があったものの、関係者の協力のもとになんとか調査を完了し、不備の目立つ本報告書を刊行することができた。

発掘調査の時期は、霜柱の立つ一番寒い時期であり、現場の作業員も通称「霧島おろし」と呼ばれる寒風に立ち向かいながら黒色土と格闘した。

そういう努力が本文中に掲載した石庭」などの大発見につながった。

さらに、市立図書館内の文化財整理室において、女性の作業員が水洗い後の土器片一点一点を丹念に整理していた際に、縄文時代晚期の土器片中に米粒を発見したことは国内初の快挙となった。焼成された土器胎土中にこのような粒が残存したということは奇跡としかいいようがない。

糊痕土器の生じる原因を佐原真氏は土器づくりと脱穀作業が女性の仕事であり、その作業場が隣接していたためではないかと推定している。

ともかく、縄文時代晚期の女性が粘土をこねる際に混入した米粒が、現代の女性によって再び見出されたのである。

よく「ちっぽけな土器をひろい集めて何になる」という心ない声を聞く。今回の発見はどんな小さな土器片も見過ごしてはならないといいい教訓になった。

黒　土　遺　跡

都城市文化財調査報告書第28集

1994年3月

編集 宮崎県都城市教育委員会
発行 〒885 宮崎県都城市姫城町6-21

TEL (0986) 23-2111 (内線 2592)

印刷 株式会社 文 昌 堂
都城市東町18街区1号
TEL (0986) 22-1121